

雲南市 幼児期 運動プログラム 実践編



雲南市幼児期運動プログラム〈実践編〉

発行年月 平成28年3月
発行 島根県雲南市子ども政策局
〒699-1392島根県雲南市木次町里方521-1
TEL(0854)40-1044 FAX(0854)40-1079
編集 雲南市子ども政策局子ども政策課

雲南市教育委員会 雲南市子ども政策局
雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会

文部科学省委託事業 幼児期の運動に関する指導参考資料作成事業
平成28年3月

子どもたちの

こころが動けばからだが動く
からだが動けばこころが動く

子どもは **動きたい 人がやっている自分も早くやりたい**
どんどんまねしてやってみたい
みてみて! できたよ! ほめてもらいたい
他の子には負けたくない 大人にも負けたくない
でも友達のことは大事 一緒にやりたい
ちょっと難しいこともやってみたい と思うもの。

そして、出来たことや新しく覚えたことを繰り返し繰り返し飽きるまでずっとやり続けるもの。

子どもが本来もっているこのような姿は、安心して動ける環境があるからこそ現れてきます。

このプログラムは、「こんな運動遊びをさせましょう」というような運動遊びの種類やそのやり方を提案するものではありません。

「子どもたちは、このような心身の発達をしていきますーそれをさらに助長していくために『運動遊び』をこのように取り入れてみましょうーそして子どもの内側から自然に芽生えてくる力を発揮させるためにこのように環境を整えてみましょう」ということを、それぞれの発達段階^(注1)、発達過程^(注2)にそって示したプログラムです。

運動を支えているのは心、遊びたいという意欲です。

心の土台をしっかりと作りながら、全ての感覚を使った豊かな遊びの経験をいっぱい積み重ねさせましょう。

そうすれば、子どもたちはこれから将来にわたって環境に適応しながら人と共に生きていくために必要な「こころ」と「からだ」を作っていくのだと思います。

遊びはやらされてやるものではありません。

楽しい! もっともっとやりたい! と心から思い、自ら行う活動が遊びです。

子どもたちの遊びの環境を整えるのは私たちです。さあ、始めましょう。

(注1) 発達段階

いくつかの発達を捉える視点から、多くの子どもに共通してみられる発達の特徴と発達の質的变化を区分し、質的に区切られた一定の期間

(注2) 発達過程

他の年齢期間とは異なる特徴を現しながら、次期に向かって連続しつつ発達していく道筋

『雲南市幼児期運動プログラム〈実践編〉』発刊に寄せて

本事業がスタートした平成24年度は、雲南市の幼児教育における「遊びと運動」を見つめなおす大きな転機となりました。この背景にあるのは、平成24年3月に文部科学省が策定した「スポーツ基本計画」と「幼児期運動指針」です。

スポーツ基本計画では、幼児期における運動指針を踏まえ、地方公共団体等が、地域の実情に応じて幼児期から体を動かした遊びに取り組む習慣や望ましい生活習慣を身に付けさせるための取組の重要性が指摘されました。

一方、幼児期運動指針では、運動習慣の基盤づくりを通して、幼児期に必要な動きの獲得や、体力・運動能力の基礎を培うとともに、様々な活動への意欲や、社会性、創造性などを育むことの必要性が指摘されています。

こうした中、雲南市においては、保・幼・小・中の発達段階に応じた系統的なキャリア教育を推進するため、平成19年度に義務教育版「『夢』発見プログラム」を作成し、続く平成22年度には、幼児期と義務教育の接続を重視した幼児期版「『夢』発見プログラム」を作成しました。

この幼児期版「『夢』発見プログラム」の大きな柱の一つが、「基礎的体力・生活リズム」です。その中で「身体も心もげんきつき」「体いっぱい動かそう」というキャッチフレーズのもと、「早寝、早起き、朝ごはん」を推奨するとともに、多様な運動にふれる機会をつくってきました。

そして、幼児期版「『夢』発見プログラム」の更なる具現化をめざし、本事業により、平成24年10月20日には「雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会」を立ちあげ、発達段階を踏まえた「運動遊び・身体活動」の共通した実践プログラムを作成することになりました。

子どもたちが「体を動かしたい」「やってみたい」と主体的に活動するための環境づくりがいかに重要か、子どもと一緒に遊ぶにあたり、保育者自身が運動や遊びの楽しさを感じるがいかに必要か、など、野々宮徹委員長を座長に、各委員の熱心なご議論をいただきながら実践プログラムの作成を進めてまいりました。

こうして、3年半にも及ぶ長い年月を経て、この度、『雲南市幼児期運動プログラム〈実践編〉』が完成しましたことはこの上ない喜びです。『雲南市幼児期運動プログラム〈実践編〉』が、理論編とともに雲南市内の保育所（園）、幼稚園、認定こども園はもとより、各所において広く活用されることを願ってやみません。

最後になりましたが、プログラムの完成にあたり、野々宮徹委員長をはじめ各委員の皆様、ご指導賜りました文部科学省、関係機関の皆様に、心から感謝申し上げます。

平成28年3月

雲南市教育委員会教育長 土江博昭

巻頭に寄せて

雲南市幼児期運動プログラム〈実践編〉が目指すもの

幼児期の運動不足や能力の低下の全国的な傾向を受けて、文部科学省は平成24年3月「幼児期運動指針」を策定し、「運動遊び」を推奨しています。目的は、3歳から6歳までの幼児期の発達過程に応じて必要な運動発達の課題を充たすいろいろな運動ができるよう、体の諸機能の土台をつくることです。

雲南市においても平成24年度に雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会を発足し、「雲南市『夢』発見プログラム幼児期版」の実践展開として平成26年3月に独自の幼児期運動プログラム〈理論編〉を刊行しました。

実践編作成にあたっては「いかにしたら、雲南市の子どもたちが遊びや運動遊びを通して、自らを取り巻く自然的・社会的・文化的環境等と主体的にかかわる力を育み、仲間とつながり、理解し合う心的・身体的能力を高めていくことができるか」という理論編の命題を受けて協議を重ねながら取り組んできました。

実践編作成のための作業部会は、雲南市子ども政策局を事務局として、全ての保育園保育士・幼稚園教諭で編成されました。そして述べ101名の先生方の参加を得て発達年齢別に3つのグループに分かれて、保育の中での子どもたちの実態から捉えた心情・意欲・態度の発達と運動的な活動・遊びの内容をもとにして、6回の協議・検討を重ねてきました。また、身体教育医学研究所うんなんの協力により、家庭における「親子のふれあい遊び」と「お手伝い」のアンケート調査を実施し、そのデータをもとに家庭・保護者に向けた別冊のリーフレットを作成しました。

実践編のコンセプトは、「こんな運動遊びをさせましょう」というような運動遊びの種類やそのやり方を提案するものではありません。

子どもの内側から自然に芽生えてくる力を発揮させるために、このような環境を整えてみましょうということをそれぞれの発達の過程、発達段階にそって示したプログラムです。

特に次の4つの観点を重視して実践編の内容を検討し、それぞれの観点を関連させて「0歳から始まる心身の発達と運動遊び（1）（2）」として表にしています。

- 1、0歳から芽生える運動欲求を起点として、7・8歳までの心と運動機能の発達過程および運動的な遊びの内容を具体的・関連的に捉えること。
- 2、プレーリーダーとしての保育者の役割（働きかけ・援助等）と物的・空間的・自然的・社会的な環境の構成および工夫について、実際的に考え実施することが出来るようにすること。
- 3、親子・人との心身のふれあいを重視し、「昔の遊び」（伝承運動遊び）や家庭における「お手伝い」の内容を通して育まれる、運動諸機能の内容を明示すること。
- 4、雲南の身近な自然環境とのかかわりの中で幼児が体験する感覚と運動諸機能の内容に注視して、自然環境の中での遊び場をマップで紹介すること。

以上の4つの観点到共通することは、幼児が本来持っている、「やりたい」「なりたい」といった自発的な運動への欲求と興味、意欲と能力を引き出すことです。

この実践編を参考として、各家庭や保育所（園）、幼稚園、認定こども園において観られる子どもたちの自発的な心の動きや遊びの意味を、運動機能の発達と関連させて捉え、より自然な運動遊びができる保育環境づくりや子どもとのかかわり方を見出してほしい。また、雲南の豊かな自然環境を活かした運動遊びを子どもと一緒に楽しんでほしいと願います。

そのことによって、子どもたち自身が主体的に挑み、運動遊びを通して親や地域の人、子ども同士のつながりを深め、自信をもって生き生きと自己の力を発揮し、他者と共に考え協同する力が育つことを期待します。

平成28年3月 雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会 副委員長 野津道代

雲南市

幼児期

運動プログラム

実践編

もくじ

1	「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び」の趣旨と見方、活用の仕方	5
2	「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び」(1)一覧表	6
3	「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び」(2)発達過程別解説表	8
4	雲南市立幼稚園・保育所(園)・幼児園・認定こども園実践事例 『夢』発見プログラム幼児期版共通題材 <体をいっぱい動かそう>	17
5	雲南市の子どもたちが経験した「名人によるプログラム」	44
6	参考文献・引用	52
7	別冊 『親子で一緒にふれあい遊び ～からだもこころもぽっかぽか～』(リーフレット) 『うんなんわくわくあそびMAP』(ポスター)	53
8	雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会名簿	54

雲南市がめざす子ども像

- 「いのち」を大切にする子ども
- 人とかかわり意欲的に遊ぶ子ども
- ふるさとが好きな子ども
- 健康で自立した子ども



「運動遊び」を積極的に取り入れましょう

そのために「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び(1)(2)」を活用してください。
0歳児から就学期1・2年生までの発達過程を追って、心と体の発達の両面からその方向性と順序性、保育者のプレーリーダーとしてのかかわり方や環境の構成のあり方、経験してほしい動きを伴う遊び、くらしの中での動きなどを示しました。
子どもたちの運動発達の過程を捉える時、指導計画を作成する時、研修の時などの参考にしてください。

0歳児から始まる心身の発達と運動遊び(1)(2)の見方

「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び」(1)…… 一覧表

6-7.p

各項目は次の内容を示しています。

発 達 過 程	生後3か月から就学期7,8歳までを9つの過程で区分
心 情・意 欲・態 度 の 発 達	各発達過程における特徴的な心の発達とそのつながり
運 動 発 達	心の発達をもたらすつながりをもった運動の発達課題(注3)
保 育 者 の 援 助	援助や環境の構成のポイント
発達段階に応じた運動遊び	子ども達が生み出す運動遊び
くらしの中での動き	運動発達につながるお手伝い

(注3)発達課題
生活年齢の各時期に共通する発達の特徴に基づき、その時期に身につけることが望ましい心情、意欲、態度

「0歳児から始まる心身の発達と運動遊び」(2)… 発達過程別解説表

8-15.p

発達過程別に次の内容を示しています。



保育者が基本的に
大事にすべきこと

特徴的な心の育ち
育てたい心情・意欲・態度

経験してほしい運動遊び

言葉かけや環境の構成に
必要なポイント

振り返りポイント
もっと面白く楽しくするポイント

指導にあたっては、「発達の仕方と速度は個人差が大きく、必ずしも一直線に進んでいくとは限らないこと、一人一人の特性に応じ個々の課題に即して行うこと」を十分配慮してください。

0歳児から始まる
心身の発達と運動遊び ①

おおむね
3か月～6か月

おおむね
7か月～11か月

おおむね
12か月～2歳0か月

おおむね
2歳

基盤となる
心情・意欲・態度の
発達のつながり

自分の手を見る
音のする方を見る
自分から人に微笑みかける
働きかけに対して声を出して反応する
おもちゃを両手を出して取ろうとする
物を取ろうとして動かそうとする
人の表情の変化を喜ぶ／興味を示す
人の動きを追う

人の顔や手をよく見つめる
なんでも口に運ぶ
触った物を動かしてみたいと思う
おもちゃのボタンに興味を示す
興味のあるところに近づこうとする

自分でしたいと思う
友達に対して思いやりの気持ちを示す
「いや」「だめ」「一人で」と思いを
通そうとする
好奇心が強くなる
助けを求める

大人や友達のまねをしてみたい
「自分で」「見て」の思いを強く
もつ
友達とのつながりができ始める
リズムに合わせて動く

いろいろなことをやってみようとする

ほめると繰り返す 失敗してもやってみる

好きなものを手掴みで自分で食べる
人見知りが始まる

指差しで要求する
身近な人のしていることに興味をもつ
大人が使う日用品に興味を示し探索する
人形に興味をもつ

平坦でない道でも歩こうとする
行動範囲が広がる

単純な

「ごめんね・入れて・
しょ」といった言葉



それぞれの
発達過程における
運動発達

吸う なめる しゃぶる
触れる 手を出す 伸ばす
左右を視る 追視する 握る
微笑む うつぶせになる
首がすわる 腹這い 寝返り(左右)する
手足をよく動かす 後ずさりをする
光に対して反応する

動きがダイナミックに変化する

かむ のむ つかむ
すわる 立ち上がる
座位を保つ 持つ
声を出して笑う
這い這いをする つかまって立つ
おもちゃを振り鳴らす

手が自由に使える

スプーンで食べようとする
めくる なぐり描きをする
拾う 手渡す 置く 押す 運ぶ
しゃがむ ふん張る
歩く 小走りをする
靴を履いて歩く
またぐ

基本的な運動機能が伸びる
指先の機能が高まる(用具の操作)

ぐるぐる丸描き、線描きをする
紙をちぎる、破く、貼る
長い階段を上る ボールを投げる
ぶら下がる 走る ギャロップをする
後ずさりで行く つま先で立つ
大きなものを持って歩く その場でジャンプする

保育者の援助

- やわらかな日常の音と光を感じさせる
- やさしくおだやかな声で話す
- ゆったり目と目を合わせて話しかける
- たくさん体にさわってあげる
- おもちゃを手の届きそうな所で示し、動かしたり鳴らしたりする

- 正面から話しかける
- たくさん話しかける
- 触れて音がするものを出す

- すべり台、スロープ、階段など部屋の中でもできる遊具を作る
- くり返し継続してできるように使いやすい場の位置を工夫する
- 散歩にでかける／外界への関心を広げる

- 散歩に意図的に継続して出かける

- 手指の操作を伴う遊びの場を作る

- 体全体を使って思う存分に遊べるようにする

- 横向きで見える玩具
- 動かして追視出来る玩具
- 手に持てる玩具 吊り玩具
- ガラガラ ベビージム
- 小さい赤いボール

- しっかりと這わせる
- 動き回れる空間を確保する
- 動きや姿勢を十分に経験させる

- (小)ボール 絵本 人形
- 鏡 木琴 マグネット
- 積木 ボタン付きおもちゃ
- ティッシュ 小さな車 袋

- (大)ボール 型はめ
- 車 ままごと 電話
- 人形 手提げ袋
- ダンボール箱 バギー

- 粘土 洗濯バサミ 布
- 三輪車 ぬいぐるみ

それぞれの
発達段階に応じた
運動遊び

- うつぶせや首すわりの遊び
- 目で追う遊び／見る遊び
- あやし遊び (いないいないばあ／たかいたかい)

- 握って振る遊び
- 握る遊び

- 音を出す遊び
- 小物を取り出したり入れたりする遊び
- 車など動かす遊び

自然の中での遊び

- 散歩(探索)
- 散歩
- 草すべり
- 石段を登る

固定遊具を使った遊び

- すべり台
- ブランコ乗り
- ジャンブルジム
- 鉄棒(ぶら下がり)

道具や用具を使った遊び

- 手押し車で歩く
- ひもをまたいで越す
- バギーにまたがり進む
- 網や線をぴよんととぶ
- マットでごろんところがる
- 三輪車乗り
- 補助有
- フープを飛び越す

上がり降りる遊び

- 段差を上がる
- 段差のあるところから飛び降りる
- ジャンプしてとぶ

鬼ごっこ

- いないいないばあ
- まてまて
- 逃げる追いかける
- 走りまわる
- 追いかっこ

ボールを使った遊び

- やわらかいボールを転がす、蹴る、放る

手遊び、リズム表現

- くすぐり歌
- ゆさぶり歌
- わらべうた
- 音を鳴らして遊ぶ
- 音楽に合わせて体をゆらす、歌う
- 動物などになりきって動く
- 音楽に合わせて歩いたり、自由に動く
- ギャロップで走る

水遊び

- 水たまりをびちゃびちゃする
- 水道やホースで遊ぶ
- 水の中を歩く
- 顔をつける

くらしの中で出現
する基本的な動作
(お手伝い)



- 物をもってくる
「〇〇をもってきて」

- 物を運ぶ
(食器を運ぶ／頼まれたものをもってくる)
- ごみを拾う
- テーブルを拭く

- 食器を配る／並べる
- 雑巾でこぼれた所を拭く
- 料理を手伝う(混ぜる)

おおむね
3歳

おおむね
4歳

おおむね
5歳

おおむね
6歳

就学期
7歳～8歳

認められたい／役に立ちたいと思う
友達の遊びに興味をもったりかわりを求める
言葉で約束を決めて、その通りに動かそうとする
分かってできることが嬉しいと感じる

動きを繰り返すことを喜ぶ

いいよ・いいがわかる

大人や友達には負けたくない
「すごいね」と言われたい
固定遊具を好んで使う
どのようにするのだろう、あんなふうになりたいな、と思う
曲に合わせて喜んで動く
ルールや決まりの中で楽しむことができる

ちょっと難しいことをやってみようとする
得意なことと苦手なことがわかる

「もっとやったらできるかも」「工夫したら出来るかも」と見通しをもつ
興味をもった固定遊具に繰り返し根気強く取り組む

励ましあったり競ったりして遊ぼうとする

友達と協力ができる

うまくなろうという自分なりのめあてをもつ

少し複雑なルールがわかる

〇〇したいという強い気持ちをもつ
で粘り強く取り組む

自分達のルールを決めて守りながら遊ぼうとする

相手の気持ちをわかろうとする

運動遊びに夢中になって取り組むことができる

友達に親切にすることができる

役割を与えられるとその役割を果たすことができる

安全に留意しながら運動することができる

勝敗を受け入れることができる

自分たちの力に応じて運動を工夫することができる

単純な動きを繰り返し楽しむ
自分の身体をコントロールする
自由な腕と手首の動きをする

手先が器用になり道具を使う能力が向上する
バランス能力も向上する
異なる2つの動作を同時に行う

大人が行うほとんどの動きができる
全身を使って複雑な動きができる

神経系の発達が著しい時期に入っていく

しっかりとした足取りで歩く

手先の器用さが増し小さなものをつかむ、ひもを結ぶ、雑巾をしぼるといった動作ができる

スピードをコントロールして走る

コーナーを曲がって走る

スキップをする

高さのあるものを跳ぶ

かかとで立つ

片足ケンケンをする

つま先歩きをする

急に動きを止める

20cmくらいの高さのものを跳び越える

両足でジャンプする

かかと歩きをする

後ろへ跳ぶ

でんぐり返しをする

前に1mくらい先へ跳ぶ

逆立ちをする

一輪車に乗る

ツースtepをする

ボールを打つ

的に向かってボールを蹴る、投げる

- 身近な自然の場で積極的に遊ぶ
- 目的をもってでかける
- 成功体験を積み重ねる
- 言葉で状況を表すようにする
- いろいろな遊具を使って遊べるようにする
- 異年齢のかかわりを増やす
- 「運動会」に興味をもたせる

- 好きなことを通して無理なく体を動かせるようにする
- 苦手な子にも抵抗感をなくす工夫をする
- こうすればやれそうだという見通しをもたせる
- 友達や保育者のやっていることをよく見せる
- 学級みんなで簡単なルールのある遊びに取り組む
- 〇〇のことね、〇〇みたいになりたい、といったようなイメージの力をうまく使う

- 簡単な遊びでも音楽をとり入れ、リズムに変化をつけながらいろいろな動きを引き出す
- 失敗やくやしさを経験する機会を大切に、一緒に乗り越えることができるように支える
- 結論を急がず、考えたり工夫したりできるようにする
- 「運動会」の活動を指導計画に位置付け、体を動かす楽しさと共に、共通の目的に向かって友達と力を合わせることを経験できるようにする

- 仲間の一員として認められ遊びの楽しさを友達と共有できるようにする
- 安全に運動ができるよう確認をする
- 多様な動きが習得できるように動きや場を工夫する

- いろいろな動きを楽しみながら経験できるよう工夫する
- ルールを確認し、みんなで楽しく遊べるような雰囲気作りを行う
- 安全に運動ができるよう確認をする
- 多様な動きが習得できるように動きや場を工夫する

ハサミ

・川遊び

・崖を登り降り

・急な山道を登り降り

・探検をする

・木に登る／ぶら下がる

・川をとぶ

・高く急なところから飛び降りる／よじ登る

・うんてい(渡り、移行、逆さ降り)

・登り棒(登り降り)

・鉄棒(とび上り・回転)

・自転車のり

・なわとび

・つなひき

・長縄とび(ゆうびんさん、大波小波)

・なわとび(早とび、交互とび)

・平均台、はしご、タイヤ、一本橋渡り歩き

・補助なし自転車のり

・跳び箱(またぎ乗り、飛び越し)

・ロープにしがみつく／よじ登る／回転する

・巧技台を組み合わせて遊ぶ

・山に登ったり走り降りたりする

・走り登り走り降りる

・氷鬼

・色鬼

・だるまさんが転んだ

・しっぽとり

・手つなぎ鬼

・陣取り遊び

・かけっこ

・ケンケンパ

・リレーごっこ

・パトンタッチリレー

・いろいろな走り方で走る

・障害物を走り越える

・つく

・ころがしドッジ

・玉入れ

・ドッジボール

・サッカー

・ボールをつきながら走る、的に向かって投げる、蹴る

・友達と組んで動く

・曲に合わせて友達と踊る

・スキップで走る

・ものになりきったりリズムに乗って踊る

・楽器を打ったり鳴らしたりして動く

・頭から水をかぶる

・水の中につかる

・プールでつかったりプールの中を移動したりする

・水に浮いたりもぐったり水の中で息をはいたりする

[ゴムとび・石投げ・おはじき・めんこ・凧揚げ・まりつき・こま回し・竹馬・あやとりなど]

- 食器を配る／並べる
- 洗濯物をたたむ
- 料理を手伝う(ゆで卵のカラをむく／だんごをこねる／鍋の中を混ぜる／枝豆をむしり取る)
- カーテンを開ける

- 花や野菜に水やりをする(ジョウロやバケツを持つ、運ぶ、持ち上げてかける)
- 帚でかく
- 料理を手伝う(生卵を割る／包丁を使って切る／フライパンの中のものをつまみ返す)
- 靴をそろえる

- 掃き集めた物をまとめて、ちり取りの中に入れる
- 雑巾をしぼって雑巾がけをする
- 料理を手伝う(包丁を使って小さく切る／混ぜる)
- 洗濯物をひっかけ

- 料理を手伝う(包丁を使って小さく切る／料理をよそう)

- 生活に必要な動きがスムーズになるので、重いものを運んだりいろいろなお手伝いをする

情緒的な絆の形成を培うために、
まわりの大人の暖かいまなざしと豊かで応答的なかわりの中で育てる

いいきもち
安心・安心



身の周りの物や音などに
興味をもち、
それに向かって自分から動く



身近な人と触れ合って、
表情や動きに応答したり、
ことばをかけてもらったり
しながら遊ぶ

おっぱいを飲む、見る、触れる、握る、
声を上げるなどを安心して行う
不快な感情を受け止めてもらう
たくさん甘える



言葉かけや環境の構成に必要なポイント



たくさん笑いかける
声をかける
話しかける
歌いかける



やわらかな日常の
音と光を感じさせる

こんな遊び
やってみて



ちょちょちあわわ
こちょこちょ たかいたかい
いないいないばー
むすんでひらいて



近くに物を置く
目の前で動かす



抱っこをする
ひざの上でゆらゆらと揺らす
手足を口にもっていく

こんなもので
遊んでみて

握る
しゃぶる 振る
音に
反応する

ガラガラ
小さいボール
小さい積み木
ベビージム



次へのステップ 這い這い 立上がり 伝い歩き に向けて

振り返り
ポイント

人の表情の変化や音に反応が乏しい

人の顔や手などの身体に興味をもたない
表情が乏しい

うつ伏せを嫌がる

✦顔をしっかりと見て名前を呼び、表情や抑揚を変えながらたくさん話しかけましょう。

✦表情や口元をよく動かして見せましょう。

(「レロレロ」「パッパッ」「ブー」「ブルブル」など)

✦おもちゃを両手でもって一緒に遊ぶ機会を増やしましょう。

✦向かい合い腹ばいになっておもちゃで遊んだり顔をあわせるなどして頭を上げるように促しましょう。

✦機嫌の良い時に腹ばいにし、一日2~3回、5分位から始め、無理をせず取り入れていきましょう。

情緒的な絆の形成を培うために、
まわりの大人の暖かいまなざしと豊かで応答的なかわりの中で育てる
自発的な探索行動(注4)を促す

あ、あ！
お、お！
(あれ見て これは何に?)



思い切り泣いたり、笑ったり、
喃語(注5)を言ったりする



不快な気持ち
(痛み、怖さ、寂しさなど)を
受け止めてもらう



すわったり、
立ったり、しゃがんだり
しながら遊ぶ



身近な大人とたくさん
触れ合いながら遊ぶ

這い這いをいっぱいする

自分でやりたいことをしたり、
行きたいところに自由に
行ってみようとする

言葉かけや環境の構成に必要なポイント



散歩に出かけたり、自然物に
たくさん触れたりさせる
(泥・砂・水・草花・石など)



体を支えながら、
四つ這い姿勢をさせたり、
立位ではねさせたりする

表情豊かに
笑いかけたり
話しかけたりする

表情豊かにかかわったり、
「じょうず、じょうず」と
褒めたりする



動きを促すように室内環境を整える
(トンネルや山など高低差のある場所を
つくる・空間を利用する)

こんな遊び
やってみて



にらめっこしましょ
べろべろばー おいでおいで
いっぽんばし

こんなもので
遊んでみて

多様に遊べるおもちゃ
音の出るおもちゃ
積み木 電話 マグネット
車 本 袋 鞆
人形 日用品

つまむ 持つ
鳴らす 叩く
押す 持ち替える 走らせる
めくる 出す



(注4) 探索行動/経験したことのない新しい刺激や周囲の環境に対して、興味や注意を向け、近寄り、それが何であるかどんなものか探ろうとする行動
(注5) 喃語/赤ちゃんが発する「アー」「ウー」などの口や唇を使わない意味のない声 言葉の原型

次へのステップ 高這いで登る 足から降りる 立つ 歩行による移動の獲得 に向けて

振り返り
ポイント

お座りはするが仰向けからの移動がない
這い這いをしないでお座りで移動する
這い這いが苦手

「ダメ」「ムム」などの禁止の言葉、
表情、動作に対し反応を返しにくい

- ✦ 機嫌の良い時に一緒に腹ばい姿勢をとって遊ぶ機会を作ってみましょう。
- ✦ 壁の前に足がつくように腹ばいにし、壁を蹴って前進する体験が出来るようにしてみましょう。
- ✦ 遊びながら足の裏を意識させたり膝を屈伸させたりして足に力を入れる経験をさせましょう。
- ✦ 少し斜面のあるスロープに腹ばいにして、抵抗を少なくして慣らしていきましょう。
- ✦ いろいろなおもちゃを低い位置に置き、おもちゃで誘いながら前方から声をかけましょう。

歩くことによって広がる様々な興味関心ややろうとすることを支える
人とのかかわりを促す



経験してほしい運動遊び



身近な場所へ散歩に出かける
広い場所や平坦でない道を歩く
斜面を登る
物を引っ張って歩く



ブランコに乗る
鉄棒にぶら下がる
滑り台をすべる
はしごをまたぐ
三輪車に乗って足でけて動く



音が出るもので遊ぶ
動物になりきって動く
友達と手をつないで歩く
腕を振って、足を上げて
曲に合わせて動く



まてまて（追いかける、逃げる）ごっこ
なぐりがきをする
ごっこやり取りあそびをする
（ままごと遊び、「はいどうぞ」
「ありがとう」）

言葉かけや環境の構成に必要なポイント

指差しに応じて
言葉にして返したり、
楽しかったことに
共感(注6)したりする

繰り返し同じ場で遊び、
安心感をもたせる
「〇〇したかったの?」と
「やってみようとする」ことを
支える

「すごーい」
「できたできた」と
いった言葉で
しっかり認める

手を添えたり、
側にいたり、
一緒にしたり
しながら支える

ごっこや
やり取り遊びの
相手をして
繰り返し楽しむ

(注6) 共感/相手の行為や表現から、イメージや感じ方、考え、意図をあるがままに受け止め、理解し、思いを共にしようとする心情や態度

次へのステップ 斜めの姿勢 走る ジャンプ バランスをとる に向けて

振り返り
ポイント

18か月を過ぎてても歩かない

歩くとき、立ち上がるときにかかとが浮いている/不安定な歩き方をする/転びやすい

人の顔を見ながら欲しい物を要求したり共感を求めるといった指さが見られない

- ✦ 早く歩かせようとして、這い這いを十分にさせましょう。
- ✦ 傾斜や段差などに這って上がつたり、滑ったりする経験をさせ、いろいろな動きを促しましょう。
- ✦ 止まる、歩く、方向を変える、物を持って歩く、手をつくなども経験させましょう。
- ✦ 人やボールなどを追いかけるように促しましょう。
- ✦ 「ちょうだい」「どうぞ」、指さし要求などでおもちゃや物のやり取りを促しましょう。

おおむね
2歳

友達や大人のまねをしたい気持ちや、いろいろなことをやってみようとする気持ちを促しながら、基本的な運動機能を高めていく

歩くことや
走ることを十分に
行いながら、
いろいろな遊びを
やってみる



保育者や友達と一緒に、
追いかけて遊んだり、いろいろな
固定遊具や物を使って遊ぶ



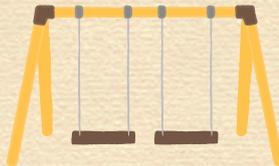
自分で!
わだわだ ○○ちゃんと
遊ぶ!
見とってー

体を動かしているいろいろな
表現遊びを楽しむ

経験してほしい運動遊び



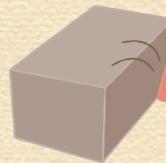
たくさん歩く
広い所を走ったり
追いかけて遊んだりする
斜面を登り降りする
自然物に触れる



鉄棒、ブランコ、滑り台、
ジャングルジムなどを
やってみる
築山で登り降りする

ボールを蹴る、ころがす、投げる
フープをくぐる、またぐ
綱を引っ張る
いろいろな所から
ジャンプする

ぴよん



かえるやバッタ、
ダンゴムシなど身近にいる
生き物になって動く
曲に合わせて感じたままに
自由に動く

言葉かけや環境の構成に必要なポイント

もう一回したい、
何度もしたいという気持ちに
応じて繰り返し一緒に遊ぶ

身近な生き物に
たくさん触れさせる

「楽しいよー」と一緒に動き、
いろいろな遊具や道具を
使ってやってみせる

生活や遊びの中で
経験したこと（生き物・
粘土や泥の感触・風など）を
自由な動きで表現できるよう
声を掛けて引き出す

「大丈夫、見てるよ」と
伝えながら安心感を与える

ジャンプする台を箱
などで作り、高さや形を自由に
組み合わせたり変えたり
できるように工夫する

ゴムひも、布、新聞紙などを
遊びに取り入れる

次へのステップ バランスをとって走る 両足で前へジャンプ 飛び降りる ケンケン遊び 前方回転 に向けて

振り返り
ポイント

体を動かす遊びに興味がない

自由に動きを表現しにくい

友達に気持ちが向きにくい

- 一緒に遊び、怖くないことを知らせたり、簡単な動きからやってみるよう丁寧に寄り添いましょう。
- 無理のないように外に誘い、好きな場所や遊具、遊びなどを時間をかけて見つけさせましょう。
- 要求や願いを受け入れ、安心して好きなことができるように環境を整えましょう。
- 面白いことや楽しいこと、興味関心のあるものを友達と共感できる場をたくさん作りましょう。

おおむね
3歳

友達を求める気持ちを受けとめ、一緒に運動遊びを繰り返し楽しめるようにする
認められる喜びやわかって動こうとする意欲を支える

〇〇ちゃんと
やりたい

これ
やりたい

わかった、
やってみる



登ったり、降りたり、
ジャンプしたり、
固定遊具を使ったりして遊ぶ

簡単なルールのある遊びを
友達と一緒にする

友達と一緒に、音楽に合わせて
いろいろな動きを楽しんだり、
友達の動きに関心をもったりする



経験してほしい運動遊び

まっすぐに走る、ジグザグに走る、
坂道や築山を走って登り降りする、
ギャロップで走るなどいろいろな走り方をする
ケンパをする



何かを表現して動く
楽器をもってリズムを打つ
友達と手を繋いだり
輪になったりして動く
大きく体を動かす

追いかける、逃げる、
鬼ごっこをする（ねことねずみなど）
かくれんぼをする



ブランコ乗り
（立ちこぎ、2人乗り）をする
平均台、巧技台、跳び箱、タイヤなどを
使って跳んだり渡ったりする
転がしたボールをよけて遊ぶ

言葉かけや環境の構成に必要なポイント

やる気になるよう
動きを褒めたり、
わくわく感や期待感をもたせる

リズムを取りやすい曲を
選び、リズムを取ることに
心地よさを感じさせる

始める前にルールを確認して、
分かってやれた喜びが
感じられるようにする

いろいろな友達と
かかわれるような
遊びや遊び方を工夫する

自由に動かしたり多様に組み合わせることが
出来る教材を作り、いろいろな遊び方を見つけさせる

「さっきより高く跳んだね」「さっきより遠くまで跳んだね」と
いうようにしたことを意識できるように具体的な言葉をかける

こうすればもっともっと楽しく心と体が動くよ

こんな遊び
やってみて

積み木や三角コーン
などを置く
数を調整する など

道具をうまく使ってみよう

目標物や障害物を置いてみましょう。

友達とのかかわりを促してみよう

友達を助けるようなルール
を作ってみたり、どうやっ
たらいいのか考えたりさせ
ましょう。

追いかけてや鬼ごっこを面白くしよう

逃げる人、追いかける人を変え
たり、捕まえ方を工夫してみま
しょう。

大人が逃げて子どもが追いかける

何かになって追いかける

捕まえたら握手する

など

おおむね

4歳

友達と一緒に遊びをつくり自分たちで協力して取り組めるようにする
自分なりのめあてをもって取り組めるようにする



身近な自然の場で
全身を使って遊んだり、
いろいろな固定遊具や運動用具を
自由に使ったりして遊ぶ

誘い合って、
ルールのある遊びを
友達と一緒に楽しみ、
喜んで動く

友達と一緒に、
音楽に合わせて
多様な動きを自由に楽しんだり、
動きを創り出したりする

もっともっと
〇〇
やりたいな

ちょっと
苦手だけど
やってみよう

経験してほしい運動遊び

いろいろなコースを走る
(障害物・でこぼこ・カーブ)
目的をもって走る
ケンパやスキップを楽しむ



綱を使って遊ぶ
(引っ張る、飛び越える、回す、揺らす)
ボールを使って遊ぶ
(投げたり、拾ったり、蹴ったりする)
園庭にある遊具(うんてい、鉄棒、
ジャングルジムなど)で遊ぶ

リズムに合わせて楽器を打つ
曲のリズムに合わせて踊る
イメージするものになって動く



鬼遊びをする
(氷鬼、しっぽとりなど)
走りながらねらいをつけたものを
とったりする



伝統的な遊びをする
(ゴムとび、石投げ、おはじき、
メンコ、凧揚げ、まりつきなど)



言葉かけや環境の構成に必要なポイント

思い切り動ける場所や
継続して出かける場所を確保する
具体的な言葉で励ましたり、
タイミングをつかめるような
言葉をかける
よく聞いて動くよう促す

どうやったら
うまく逃げられたのか、
うまく出来たのが気づかせたり
考えさせたりする

いろいろな曲の感じや
リズムの違いに気づかせる
少し難しいかなと思える
こともやってみせて、やってみよう
かなという気持ちを引き出す

モデルとなる年長児の存在や
年下の子の頑張る姿が
やる気につながるので、
異年齢の交流を大事にする

こうすればもっともっと楽しく心と体が動くよ

こんな遊び
やってみて

友達とのかわりを促してみよう

友達と肌で触れ合うような動きが
できる遊びを構成してみましょう。

体のあちこちをくっつける
手と手をつなぐ など

音楽やタンバリン、太鼓などの音を効果
的に使ってみましょう 友達の動きに気
づかせるように声を掛けてみましょう。

音をしっかりと聞いて動く
2人組→3人組→4人組というように
人数を増やしていく
など

鬼遊びやゲームを工夫してみよう

いろいろな動きが出来るよう道具を
使ったり、ルールを決めて動くよう
に促してみましょう。

ぶつからないようによけて走る
体を瞬時に移動させる
など

おおむね

5歳

興味をもったことに繰り返し、根気強く取り組めるようにする

もっとできるようになりたい、もっとうまくなりたいという気持ちを支える

ちょっと
難しいけど
できるまで
あきらめんよ

友達と
一緒にやると
楽しいからわ

固定遊具やいろいろな
運動用具を使った
遊びに挑戦する

ルールのある遊びを友達と
一緒に考え、工夫しながら遊ぶ

いろいろなリズムの音楽にふれ、
いろいろな表現や動きをする

経験してほしい運動遊び

川遊びをする
崖登り、崖すべりを
繰り返す
木登りに挑戦する



そのものになりきって
全身でリズムに乗って
表現したり動いたりする



巧技台、跳び箱、平均台
などを組み合わせて遊ぶ

ねらった所にボールを
投げる、転がす、蹴る、捕る
ボールが来る所へ動く
逃げたり、追いかけたり、すばやく動く



伝承遊びをする
(こま回し、竹馬、あやとり、まりつき、
だるまさんがころんだ、あぶくたつた、
はないちもんめなど)



いろいろな方向に走る
障害物を走り越える
前や上に跳ぶ
連続して跳ぶ



言葉かけや環境の構成に必要なポイント

具体的に動きを意識させたり、
気付いたりするよう声をかける

一人一人が自分の目標を
もてるよう支える

自分たちでルールを
作っていくように促す

いろいろな大きさや重さ、
質のボールを準備し、
投げる遊びを楽しめるようにする

勝ち負けや

できるできないではなく、
自分なりの挑戦をし、
満足感を得ることが大事だ
ということを伝える

音楽やお互いの声を聞きながら
合わせて動けるようにする

音やリズムに合わせて動きを
変えていく楽しさに気付かせる

こうすればもっともっと楽しく心と体が動くよ

こんな遊び
やってみて

みんなであ
丸くなって
縦につな
がって
横につな
がって
向かい
合って
背中
合わせで

友達と一緒に力を合わせられるようにしよう

手を繋いで動くことを楽しめるよ
うにしてみましょう。

跳び箱等の遊びを面白くしよう

段差をつけて、跳び上
がり、降りたり、またいで移動
したりなど、手を突く、またぐ
など手足の動きを意識した遊
びを多様に経験させましょう。

走る・跳ぶの遊びを工夫しよう

- ・ニヨロニヨロ、ジグザグ、ケンパ
などいろいろな走り方ができる
コースをつくりましょう。
- ・コーンや、跳び箱など障害物を
置いて、友達と競い合えるよ
うにしてみましょう。

おおむね

6歳

友達と一緒に遊びをつくり自分たちで協力して取り組めるようにする
自分なりのめあてをもって取り組めるようにする

固定遊具や
運動用具などを使って
めあてをもって遊ぶ



いろいろな走り方や跳び方、
体を回転させるなど
巧みに体を使う遊びをする



ぼくたち、
わたしたち、
仲間だよね
ぼくたち、
わたしたち
だからんだ
できるんだ

水の中で
楽しんで遊ぶ



ルールのあるゲーム遊びを
友達と一緒に考えて工夫しながら遊ぶ



友達と一緒に表現遊びや
リズム表現遊びを自由に楽しむ

経験してほしい運動遊び



自然の地形を利用して
ダイナミックに動く
自然の中の木や
ツルなどを使って遊ぶ

リズムに乗って動いたり、
全身の動きで表現したりする



もぐる、浮かぶなど
喜んで水の中で遊ぶ

安全に気をつけながら
跳び箱、鉄棒、マットなどを使って、
体を支える、移動する、回転する、
飛び越すなどの動きに挑戦する



走ったり、跳んだり
いろいろな動きを
しながら鬼遊びをしたり、
ボールを使って遊んだりする

言葉かけや環境の構成に必要なポイント

安全に配慮し、
身近な自然環境の中で
ダイナミックに
動けるようにする

どうやったら
もっとうまくいくのか
考えさせながら
競争心や挑戦意欲を引き出す

失敗や悔しさなどの
心情にも寄り添い、
友達に励まされたりして
乗り越えようとする
気持ちを支える

「運動会の活動」を
指導計画に位置づけ、
いろいろな運動遊びや動きを
楽しんでできる喜びを友達、
仲間と共有させる

こうすればもっともっと楽しく心と体が動くよ

表現リズム遊びを面白くしよう

こんな遊び
やってみて

陣地のある鬼遊びをやってみよう

追いかける、逃げるを基本にしながら
陣地を作って捕まえた相手を連れてくる、
味方にタッチされたら復活できる、
挟み撃ちにする、など作戦を考えて力を合
わせるようにルールを増やしてみましょう。

陣地とり など
しっぽとり

経験や遊んだことを基に、イメージ
したり模倣したり場面を想定しなが
らなりきって動くよう促しましょう。

忍者 乗り物 遊具
お餅やポップコーンなどの食べ物
洗濯されている衣類 干してある衣類
飛ばされた衣類 など



ひとりでも
友達と



たつ



まわる



すわる



ぶらさがる



おきる



わたる



およぐ



のる



うく



あるく



はしる



すべる



もつ



のぼる



ねころぶ



はう



くぐる



はねる



はこぶ



とぶ

こんなこと
こんなこと
できるかな?



とる



おす



おりる



こく



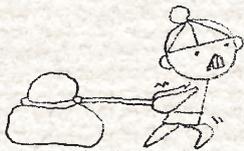
あてる



ころがる



よける



ひく



ほる



なげる



うつ



ける



つむ



ころがす



ふる



つかむ

雲南市立幼稚園・保育所(園)・幼児園・ 認定こども園実践事例

平成25年度「夢」発見プログラム幼児期版実践事例集より

～体をいっぱい動かそう～

0歳児の実践

- *うつ伏せができるようになったD児(6か月児)
～機嫌の良い時に玩具を使って誘う～
- *S児の「○○したい気持ち」を引き出す(9か月児)
～褒めたり、積極的に誘ったりする～

1歳児の実践

- *A児 這い這いから歩行へ(1歳0か月児)
～園庭や保育室の環境を整える～
- *K児 斜面や凹凸、段差のある場所を歩く姿から(1歳2か月児)
～地域の自然環境をいかす～

2歳児の実践

- *箱からジャンプの遊び
～跳ぶ環境を自分でつくって取り組む姿を支える～
- *追いかっこの遊び
～先生や友達と一緒に体を動かす楽しさを経験させる～

3歳児の実践

- *ジャンプができるよ、もっとしたい
～「遠くまで跳びたい」という挑戦意欲を支える～
- *ケンケンパの遊び
～室内環境を工夫して作る～

4歳児の実践

- *崖のぼりの活動
～自然環境の中で多様な経験をさせる～
- *ドッジボールの活動
～学級みんなであてをもつて取り組む～

5歳児の実践

- *茶畑の山のブランコをめろん組にも作ろう
～学級の活動にいかせるよう環境を構成する～
- *リレーの遊び
～リレーのやり方を見つけていく過程を支える～

4,5歳児混合学級の実践

- *先生、赤土の丘へ行こうよ
～身近な自然の場で四季を通して
様々な体の動きを経験させる～



1. 中心となった活動

D児のうつ伏せができるようになるまでの場面を捉えて

2. 子どもの姿の捉えと活動（場面）が生まれた発端及び根拠

生後6ヶ月で入所し母親と離れた生活が始まるがあまり人見知りもなく抱っこであやすとよく笑う子であった。眠たくなったり、お腹が減ったりすると大きな声で泣き、食欲は旺盛だが睡眠は浅くすぐ目覚める子であった。運動面では入所してから寝返りができるようになったが、座った姿勢にしてみらうことが好きで仰向けやうつ伏せにすると嫌がって泣いていた。発達過程としてうつ伏せを経験することが体の成長や発達やハイハイや歩行の発達にも必要であると感じて機嫌の良い時に少しずつ仰向けやうつ伏せの姿勢にしていく。

3. ねらいと内容

◎担任とふれあいながらいろいろな姿勢を経験して体を動かそうとする気持ちをもつ。

○担任と遊びながら仰向けやうつ伏せになる。

○仰向けやうつ伏せでおもちゃを見たり、握ったり、なめたりする。

○寝返りをしたり、うつ伏せから少しずつ体を動かす。

4. 活動の概要

D児の姿	環境の構成と手立て
<p>4月上旬（生後6か月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・あまり人見知りもなく、ミルクを飲んだり、抱っこやお座りをしていると機嫌がよく、仰向けやうつ伏せにすると嫌がり泣きだす。 <p>4月中旬</p> <ul style="list-style-type: none"> ・仰向けだと少しずつ嫌がらず足を上げたり、玩具を手を持ってなめたりして遊んでいる。うつ伏せにするとすぐ泣き出している。 <p>4月下旬</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お座りから体を前に倒そうとしたり、そばの玩具を引っ張ろうとしたりしている。うつ伏せになっても嫌がって泣くことが減り、短時間なら音の鳴る玩具を見ている。 <p>5月上旬（生後7か月）</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新入児の入所があり、新入児の泣き声につられて泣くようになる。うつ伏せになるが首を上げる力が弱くすぐに顔を床につけている。 ・庭のクローバーの上に座ると、手を伸ばし 	<ul style="list-style-type: none"> ・抱っこをしたり、やさしく語りかけたりしながら少しずつ担任や新しい生活に慣れていけるようにする。 ・機嫌の良い時に玩具で誘いながら仰向けやうつ伏せの姿勢ができるようにする。 ・自分から前のめりになってうつ伏せになりそうではあるがお座りが好きな姿勢である。<u>機嫌の良い時に好きな音の出る玩具で遊びながらうつ伏せに慣れるようにする。</u> ・新入児の入所によって不安定な気持ちになっているので抱っこをしたり、笑顔であやしたりしていきながら、安心感をもちながらひよこ組での生活ができるようにする。 ・戸外ではクローバーに興味をもったりし

て葉っぱをちぎろうとしている。



5月中旬

・早番保育で0～2歳児が集まる1歳児の部屋ではうつ伏せになっても嫌がらない。

・お腹を軸にして回ることができるようになる。

6月上旬（生後8か月）

・フローリングではうつ伏せになるとずりバイで前進ができるようになる

て気分転換もできたりしているので体調の良い時には戸外に出て遊ぶようにする。

・首や腕の力がまだ弱いようであるので母親に家庭での様子を聞く。お座りをさせて遊んでいることが多く、うつ伏せは嫌がって泣いているとのこと。ハイハイへ向けてもうつ伏せをすることが大切であることを伝え、無理のない所で家庭でもうつ伏せで遊んでもらうようにする。

・1歳児の部屋では1，2歳児の姿を見て動こうとする意欲につながっているようであるので、1歳児の担任と連携をとり時々遊びに行くようにする。

・動きやすい場所を選んだり、ほめたりしながら自分で動ける楽しさが味わえるようにする。

5. 考察

・D児は保育所に入所して生まれて初めて母親と離れたことで今までの生活が変わった。まずは担任に慣れるようにスキンシップをとったり、生理的欲求を満たしたりして安心して過ごせるようにした。

・お座りの姿勢が好きになったD児にもう一度うつ伏せを経験させていくのはとても時間がかかった。担任とふれあう中で経験できるようにしたり、戸外や1歳児クラスに出かけ気分転換をしたり、異年齢のかかわりの中で大きい子の動きを見ることで刺激が受けられるようにしたりした。機嫌の良い時に無理をせず、その子にあった環境構成にしていくことの大事さに気づいた。また、発達のだ筋を順に追って経験させていくことが体の成長や発達を促し、少しずつ自分で動けることがハイハイへの意欲につながったと考えられる。

6. まとめと課題

・発達には個人差が大きいので子どもの出生時の体重や首のすわりや寝返りなど発達の過程を知ることで発達の課題をつかみ子どもの成長や発達を保障することになる。

・発達の道筋を保育者が理解し、家庭と連携をとりながら発達を促していくことや時間をかけて無理をせず継続して支えていくことが大切である。

1. 中心となった活動 S児の「～したい」気持ちを引き出す
2. 子どもの姿の捉えと活動が生まれた発端及び根拠

S児は9月に途中入所をして、当初はなかなか環境に慣れず、表情も固かったが、徐々に保育者との信頼関係を結び、笑顔を見せ始め、安心して生活を始めた。しかし、入所時点で9カ月のS児は、仰向けの姿勢のまま手の届くところにある玩具を持って遊んでいる姿が多く、そこから移動しようとしたり、姿勢を変えたりする姿はあまり見られなかった。又、おむつを替える時やふれあい遊びなどをする時に足に力が入らず足がブラブラしている事が気になった。10月に入り少しずつ腕の力を使ってずり這いをするようになった。表情がいきいきとし始め、見つけた物を手にすると、とても嬉しそうに声をあげて喜んでいた。しかしその時点でも足を使う姿はなく、物を取ろうとして足に力を入れ突っ張ったり、足の力を使って移動したり、遊んだりしない。どのようにして足に力を入れる経験をさせ「～したい」という気持ちを引き出せるのか考えていた。

3. ねらいと内容 触れ合い遊びをする中で足に力を入れる。

4. 活動の概要

子どもの姿 保育者のかかわり 考察

10 / 23

寝ころばせた状態でS児の足の裏に手を当てて足の裏を押ししたり、足首を持って膝の屈伸などをして一緒に楽しむ。

いつもしている触れ合い遊びで初めて保育者の手を足で跳ね返す。

その跳ね返した事を「すごい」と声を上げて喜びながら、体を起して脇を持ち保育者の膝の上でピョンピョンさせるように支える。

まだできず、足の裏に力が入らない

11 / 1

保育者が傾斜30度くらいの段ボールの斜面の玩具の上からS児を「おいで～」と誘う。

まだ登ることはできないが、手の力で登ろうとしている。

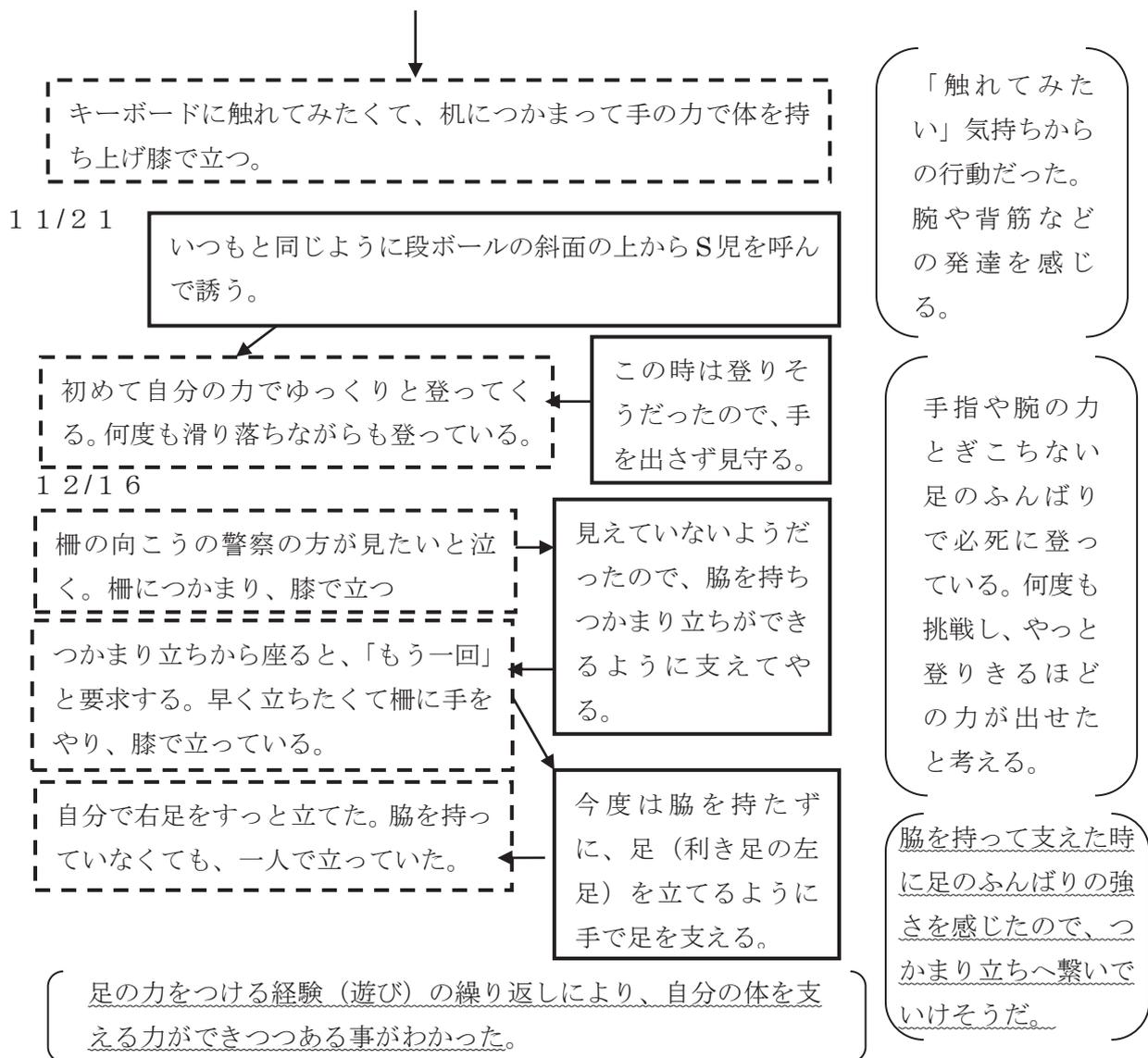
S児の足の裏を支える。

11 / 5

S児の大好きなキーボードを少し高い所に置いて弾いた。

保育者とのやりとりを楽しみむ中で偶然にできた。しかし、偶然を繰り返す事で足に力を入れるコツがつかめると思った。

「～がしたい」という気持ちの高まりを感じる。その思いに添い、支えると足の親指に力を入れている事がわかった。



1 歳児の実践

1. 中心となった活動

- ・A児がハイハイから歩行していく場面を捉えて

2. 子どもの姿の捉えと活動（場面）が生まれた発端及び根拠

みかん組は、男児6名、女児6名の12名のクラスで、月齢幅も1歳0ヵ月～1歳11ヶ月（4月当初）と広い。

A児は3月30日生まれで（1歳0ヶ月）新入児でクラスの中で唯一ハイハイをしていた。新入児であったが、園生活にもすぐに慣れ、情緒も安定しており、室内ではハイハイで自由に動き回り、探索活動を活発にしていた。しかし、歩行している子ども達の中で、ぶつかったり、踏まれたり、上から乗られたりすることも多かった。また、入園当初の母親との面接時に、大便時は泣くので、仰向けに寝転がせて両足を持ち上げるようにすると排便できるということを聞く。園生活の中では、つかまり立ちをしても、踏ん張れないからか安定感がなく、すぐに座り込みつかまり立ちをしてオムツ交換をすることがスムーズに出来にくかった。

このことから、A児の足腰の弱さを感じ、足腰の発達を促すような保育者の意図的なかわりと、環境構成の必要さを感じる。

3. ねらいと内容 ◎・・・ねらい ○・・・内容

◎全身を動かして遊ぶことを楽しむ。

○ハイハイまたは、伝い歩きをしながら、自分の行きたいところへ行く。

○立つ、しゃがむ、またがる、握る、つかむ、押す、よじのぼるなど、全身でいろいろな動きをする。

4. 活動の概要

子どもの姿	保育者の手だてと環境構成
<p>4月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・初めての集団生活だったが、人なつこく、保育者に親しみをもち、笑顔で登園するようになる。 ・室内ではハイハイで活発に動き回るが、歩行している子ども達に行き先を遮られたり、上から乗られたりすることが多い。 ・戸外では、手足に砂がつくことを嫌がり抱っこを求めてくる。 ・排便時に泣き、保育者の援助で排便したり、つかまり立ちをしていても安定感がなく、すぐに座り込んだりする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・動くことに意欲的だが、月齢の高い子ども達の中で、危ないこともあるので安全面に配慮しながら近くで見守り、A児の動きを保障していくようにする。 ・早く歩行させようとせず、室内でも戸外でも、ハイハイを十分させていくように担任同士で話し合う。 ・戸外では砂や草の感触を嫌がるので、保育者も一緒に砂で遊んだり、芝の上に座ったりすることを繰り返す。 ・「泣く」サインを見逃さず、スムーズに排せできるよう援助をする。 ・<u>保護者にも園での様子や、担任の思いを伝え焦らず十分にハイハイをさせたり、動いたりすることを大事にしてもらう。</u>
<p>5月初め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・戸外で、ハイハイで動き回ることや、裸足で出ることに抵抗がなくなってくる。また、しゃがむことやつかまり立ちが長い間できるようになってくる。 ・友だちの動きを見て、行ってみたり、してみようとしていたりする。また、保育者の励ましや認めで少し頑張ってみようとする。 ・箱車に乗って、友だちや保育者に押してもらうことを喜ぶ。箱車に乗ろうとするがバランスを崩し中へ落ち込んだり、乗れず諦めたりする。箱の中に入ったら自力で出られない。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分から動いていく姿を大切に、すぐに手を出さず、見守ったり励ましたりしていく。 ・<u>A児の動きを見ながら、斜面や段差など少し抵抗感のある環境にも誘い、いろいろな動きを促していけるようにする。</u> ・<u>室内でも、様々な動きを促す遊具として、ダンボールの箱車（高さ20センチ）を作る。</u> ・“友だちと同じことがしたい”という思いが満たされるように支え、「できたね」「すごいね」など言葉で返して共感していく。 ・箱車の側を持って立ったり、押したり、またごうとしたりする姿を見守り、一緒に遊ぶ中で時には、意



<p>5月下旬</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分で箱車を持ちバランスをとってまたぎ、自在に乗り降りできるようになり繰り返し乗り降りする。 ・保育者の援助なしで排便したり、つかまり立ちをしておむつ交換をしたりすることが出来るようになる。 ・一人で立ち、保育者に「すごい」など認められ自分でも手を叩いて喜ぶ。 	<p>図的に箱車の中に乗せて出ようとする動きを促していく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな動きを繰り返し楽しんでいる姿を認める。また、「乗ってください〜い」「出発しま〜す」「着きました」など箱車の乗り降りを楽しめるようなかわりをしていく。 ・「いっばいたっちしたね」「上手にできたね」などA児の嬉しい気持ちに共感していく。
<p>6月</p> <ul style="list-style-type: none"> ・総合遊具のすべり台を逆から上ろうしたり、階段を上りすべり台を滑ることを繰り返したり、築山に自分から上ったり、さらに活発に動いて遊ぶようになる。また、立って周りを見渡したり、伝い歩きで移動したりすることも多くなる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・家では、すぐに抱っこを求めてくるということ聞き、日々の成長や保育者の支え方をより丁寧に伝えていくことで、保護者のかわり方も見直していけるようにする。 ・遊具は子ども達が集中するので、安全面に配慮しながら近くで見守る。
<p>7月初め</p> <ul style="list-style-type: none"> ・自分から一步踏み出し、二、三歩歩く。保育者に認められたことを喜ぶ。 ・二、三歩歩いては、ハイハイで移動することを室内でも戸外でも繰り返す。 ・7月下旬ごろにはよく歩くようになる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・階段をつかまり立ちで前向きに下りようとするので、友だちが後ろ向きに下りる姿を見せて下り方を知らせていく。 ・立った時に名前を呼び、一步を踏み出すきっかけを作ったり、両手を持って一緒に歩いたりする。 ・歩いたところを見て、「上手、上手」「歩けたね」など拍手をしたり、一緒に喜んだりして、歩くことに意欲的になれるような言葉がけをしていく。



5. 考察

- ・保育者が近くで見守っていたことで、自分から行きたいところへ動き回ることが十分にできたのではないかと。また、嬉しかったことや面白かったことに共感してもらったり、危ない時には支えてもらったりしたことで安心感を持って、大きな総合遊具や大きな築山（マウンテン）での遊びを十分に楽しめたのではないかと。
- ・自分の動きを保障してもらったことで、より活発に動け、立つ、しゃがむ、またがる、握る、つかむ、押す、よじのぼる、などの全身を使った様々な体の動きが経験でき、発達が促されたのではないかと。

6. まとめと課題

- ・入園当初のA児の様子から、足腰の弱さを課題と捉え、全身を動かしていけるような環境や遊びが必要だと考え、担任が園庭や保育室の環境を捉え直した。加茂幼稚園の園庭は1歳～2歳が安心して遊べる環境が整っていることが魅力的である。低年齢向けの総合遊具や、大きな築山（マウンテン）は、子ども達一人一人の発達や経験に合った動きを自ら選んで遊ぶことが出来、全身の動きを促すのにとても有効な環境なのではないかと感じた。4月初めから自然の中に出掛けて行きにくい1歳児にとって、大きな築山の斜面は場所によって斜面の長さや傾斜が違ったり、凸凹の場所があったりすることで、様々な動きを誘発するのに有効な環境なのではないかと思う。また、保育者の立ち位置や子どもの動きをどこまで保障していくかなど、担任や他のクラスの保育者と連携を取り合ったり、環境を整えたりすることが大切だと感じた。また、子どもの好奇心をくすぐりながら、時には少し抵抗感のあることに誘って動きを促したり、挑戦する気持ちや満足感を持たせたりしながら保育していくことで発達を促していけるのではないかと感じた。
- ・月齢で発達の差がある1歳児は、一般的な発達段階を理解した上で、担任が一人一人の発達や経験の差を丁寧に捉え、何かが出来ようになることを急がず、発達を促すような環境構成や援助をしていくこと、担任同士が連携することはもちろん、他のクラスの担任とも情報交換をし、子どもを理解して連携していくことが大切であると考えた。

1 歳児の実践

(対象児 1 歳 2 か月)

1. 中心となった活動(場面) 斜面や凸凹、段差のある場所を歩く姿から

2. 子どもの姿の捉えと活動

H24.9.29 生まれ。6 月より 9 ヶ月で入園する。入園時より這ったり伝い歩きをしたりして活発に動き回っており、11 か月ごろより歩きはじめる。食欲旺盛でよく食べるが小柄である。室内では活発に動いて探索をしているが、園庭では動きが少なくその場で立ったままだったり、抱っこを求めることが多かった。何もないところで足が絡まり転んだり、傾斜のあるところでは立ち止まり、上ろうとしなかった。家庭では危ないからと抱っこされている時間が多いようで、経験も少ないのではないかと考えた。まずは動ける室内で足に負荷のかかる場所を作り、遊びながらしっかり歩けるように支えていこうと考えた。

3. ねらい・内容 ◎足に力を入れて歩く。

・斜面や凸凹でバランスをとって歩いたり、這って上ったり滑ったりを経験する。

4. 活動の概要

子どもの姿	保育者の手だてと環境構成
<p data-bbox="271 846 662 878">遊戯室での様子 (11 月上旬)</p>  <ul style="list-style-type: none"> ・友だちが滑る様子を少し離れた場所から見ている。 ・立ったままであがろうとするが滑ったり不安定で座り込んだりしてあがれない。 ・何度か試みて保育者を見る。 ・這うと上にあがれ、あがってから保育者の顔を見る。  <ul style="list-style-type: none"> ・表情が和らいであがったままの形で滑って下りて、何度か繰り返す。 ・保育者が積木を持ってきて並べていると近くで立って見ている。保育者がマットを積木にかけようとする少し離れてまた近くへくる。 ・2~3 人の子どもたちと一緒にマットに手をおいて、跨ごうとしたり、あがろうとしたりする。 ・マットの山が混んでくるといつか離れるがまた来てあがったり滑り下りたりする。 	<p data-bbox="965 801 1300 833">保育者の手だてと環境構成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・クラスの子どもたちが少し高いところへあがったり下りたりする姿をよく目にすることやK児にも楽しく遊びながらしっかりと歩ける力がついてほしいと、室内の環境を見直し、傾斜のある場所を作ることにした。 <p data-bbox="853 1093 1444 1160">*積木や段ボールを使って子どもが這ってあがれるすべり台を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・興味があり見ているのだと思い「Kちゃんもしてみよう？」と声をかける。そして保育者が一緒にすべり台のところへ行く。 ・「あがれないね」とK児の思いを言葉で返し見守る。 ・保育者が手をつけて這ってあがるのを見せる。K児が嫌がらないか様子を見ながら「こうしてみたら」と手を持ち這う格好にする。 ・あがって目が合った時に「できたね」「すごいね」「やったあ」などうれしい気持ちを汲みとり共感した言葉をかける。 <p data-bbox="853 1691 1444 1724">*積木とマットですべり台より低い山を作る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちみんなに向かって「おやまに来てもいいよ」と言葉をかける。 ・マット一枚の幅なのでみ出して落ちないように近くで見守ったり、子どもの動きを見ながら「よいしょっ」「シューッ」「がんばあれ」などの言葉をかけ楽しい雰囲気を作ったりする。子どもが何人も一緒にするようなら、別のマットの山をもう1つ作ったりして、あそびたい気持ちが満たせるようにする。 ・「Kちゃん上手に滑るねえ」「シューッ」「でき

<p style="text-align: center;">*散歩に出かける。(11月下旬)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・保育者と手をつないで一緒にアスファルトの上や、砂利道、草原などいろいろな道を歩く。また、階段や斜面のある場所に行く。  <ul style="list-style-type: none"> ・時々足がもつれて転びそうになるが、保育者の手をしっかりと握りついて歩こうとする。  <ul style="list-style-type: none"> ・着いた場所で友だちの後ろを追いかけてたり探索したりして、いろいろなところで地面を踏みしめ歩く。 	<ul style="list-style-type: none"> ・「たできた」など楽しくなるような言葉をかけて見守る。 ・高さや角度など、変えてしてみる <ul style="list-style-type: none"> ・園内では作ることができない自然の環境にて、いろいろな場所を歩く。 ・散歩の時はいつもベビーカーに乗って行き帰りし、目的地へ着いたらベビーカーからおりて活動していた。K児に1対1でつくことが可能だったこともあり歩かせてみることにした。 ・まわりの物を見てK児のしぐさや表情から気にとめたことにも応えながら歩幅を合わせてゆっくりと歩くようする。 ・K児のペースを大切に表情をのぞいて見るようにする。疲れてきていたらベビーカーへ乗せようと思っていたが、足がもつれて転んでも歩きたい様子で行きはすべて歩いたK児だった。
---	---

5. 考察

友だちに興味をもつようになっていたため、友だちの真似をして自分からあがるようになったK児。あがりおりする活動を通して、K児も足腰を鍛える経験ができてよかった。また、室内では作ることのできない凸凹道や砂利道・草原など、その場に応じた歩き方やバランスをとって歩いたりする経験ができるような地域の自然で子どもたちが活動することが大切だと考える。

6. まとめ

まわりの友だちのしていることにも興味をもち、同じことを自分もしてみたいという欲求が保育者と一緒にすべり台へ向かう姿になったのだと思う。自分の力でできたうれしさを表情や視線で表した時に保育者が子どもの思いに添った言葉や共感した言葉をかけていくことで、何度でもくり返ししたり“もっとしてみようかな”“あれもしたいな”という気持ちになるのだと思う。

7. 課題

個人差の大きい0歳児であるので、保育者は子ども一人一人の運動面での発達の段階を的確に捉え、その時々個々の心の状態に応じて柔軟に環境を構成していくことが大切であると改めて考えさせられた。歩行が確立すると行動範囲がさらに広がるので、安全面には十分に配慮して探索意欲を満ちし、思いきり体を動かせる環境を構成していきたい。

2歳児の実践

(対象児A児男児3歳1か月・B児男児3歳0か月・
C児男児3歳0か月・D児女児2歳11か月)

- 1・中心となった活動 箱からジャンプ
- 2・子どもの姿の捉えと活動が生まれた発端及び根拠
 - ・みかん組は男児の人数が多く、体を動かして遊ぶことが大好きなクラスである。今は、特に高いところから跳んだり、ジャンプしたりして遊ぶことが好きで、跳べる場をみつけて楽しんでいる。
 - ・基本的な運動機能が伸びてくるこの時期、足腰の運動機能も発達してきて、跳んでみたい意欲を大事にしたいと思っていた。
 - ・不安定で危険な場もあり、思い切りできないこともある。そこで、食事時や遊びの中で並べて使っていた箱を「これも使えるよ」と、箱を出す。今まで使っていた親しみのあるものであり、安定していて、自分で作りかえることができるものなので、つなげたり重ねたりして、遊ぶようになった。

※箱は牛乳パックに新聞を詰め3個組み合わせたもの。



3・ねらいと内容

○自分に合った遊具を使って跳ぶことを楽しむ

- ・遊具を使っていろいろな高さや幅を跳ぶ
- ・自分に合わせた高さの台を作り跳ぶ

4・活動の概要

子どもが経験したこと	環境の構成と手だて
4月初旬 ・ 食事の時に椅子の代わりに箱を出してきて座る。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 自分で好きな箱が選べるように興味が持てるようなデザインの箱を人数分用意しておく。
6月中旬 ・ 保育者と一緒に箱を並べて道のようにして歩いたり、ままごとのテーブルにしたりして遊ぶ。	
12月中旬 ・ B児がロッカーの上に上がりジャンプをする。	<ul style="list-style-type: none"> ・ 身近にある箱を遊びの中に取り入れ、使いやすい場所に置いたり、一緒に遊びを楽しんだりする。 ・ 楽しいことは受け止めながらもロッカーの上には上がらないことを知らせ、箱を3段積み上げ「これを跳んでみるか」と誘う。 ・ 安定させた形を自分で作ったことやジャンプできたことを認めたりできたうれしさをうけとめたりする。 ・ できた嬉しさを受け止め「すごい、やったね」と声かけをする。 ・ 自分たちで倒れた箱を並べ替えたり、作り直そうとしたりする姿を見守る。
・ ロッカーを降り、箱からジャンプする。	
・ A児がやってきて一緒に跳ぶ。そのうち、箱6段をふたつつけて安定させた形にし、さらにそこへ上がれるように、後ろには階段を作り登って跳ぶ。	
・ それを見てC児など他の子どももやってきて跳び始める。	
・ A児は6段が跳べたことを喜び、何度か跳んだ後、次は8段に挑戦してみる。8段でも安定していて倒れないことを確認しながら登り、跳ぶことができ喜ぶ。	
・ そこへB児がやってきて、積み上げた箱を倒してしまう。	
・ A児は泣いたり怒ったりすることはなく、C児と崩れ落ちた箱を次は平らにきれいに並べ始める。	
・ 一か所だけ2段にし、2段から1段に跳ぶ。	



- ほかの子もやってきて、平らにした場から、さらに箱をつなげていき、そこを歩く。
- つなげていった箱を少し離してジャンプをしてみる子もいる。
- D児は経験も少なく、運動機能の発達もゆっくりである。最近になり、跳ぶことがとても楽しく、2段まで跳べるようになりとても喜んでいる。A児が6、8段跳んでいるときに興味を持ち見ていたが、あの高さは跳べないと感じ、自分で新たに箱を持ってきて2段にし、自分に合わせた高さのものを作り跳ぶことを楽しんでいた。



- それぞれが自分なりに判断して自分が跳びたい形や高さを作り跳ぶ姿を見守ったり、「見とって」と見てほしい気持ちを認めて応えたりする。

5・考察（運動的な遊び・運動発達に有効だった指導性、環境構成）

- ジャンプする遊具となった箱は、頑丈ではあるが2歳児の子どもが持ち運べ、組み合わせを変化させて遊ぶことができるものである。「やってみたい」という思いと身体の育ちがぴったりと合ったこの時期、自分で動かしたり変えたりできる、自分の能力に合う箱がよかったのではないかと考える。また、取り出しやすい場に環境の一つとしてあることが遊びの広がりにも重要であったといえる。“今やりたいこと”、“今してみたいこと”を瞬時に捉え、子どもの発達と一人一人の体が欲求しているものを合わせて必要な環境を整えていったことが有効だった。普段から、生活の中で使っていた箱が、その時、子どもにとって必要だと捉え、使えるようにしていった保育者の見極めも大切だった。
- 友達がすることをまねて一緒にしてみたり、自分なりに変化させて楽しんだりする姿が見られた。友達の遊びや存在が、遊ぶ上で大きな刺激となり、「やってみたい」「次はこんな風にしてみよう」という意欲につながった。

6・まとめ（活動を通して培われた心情、意欲、態度）

- 今興味を持っている「跳ぶ」という遊びを通して、足の屈伸、着地するときのバランス、支え方などの身体機能、運動能力を高めることができたのではないか。
- 箱が倒れないよう安定するため二つをつなげることで幅を作ったり、自分に合わせた高さや跳ぶ距離を広げるために箱と箱の間を開けて並べたりしていた。自分がしたい遊びに合わせて、考えたり工夫したりしながら遊ぶ経験ができた。
- 積み上げた箱が崩れてしまったが、そこからまた新しい遊びを思いつき、楽しむことができた。うまくいかなかったことも気持ちを切り替えてそこから立て直していく発想の転換をしていくひとつの経験となった。
- 「できた」という嬉しい経験は「またしてみよう」「次はもっとこうしてみよう」という意欲につながった。

- 7・子ども一人一人の発達や興味は日々変化している。今、やりたいことを常に把握し、それに合わせた遊具の準備や、保育者の見守りや声かけで子どもの遊びたい気持ちも変わってくるので今後も大事にしていきたい

2 歳児の実践

1. 中心となった活動 “おに” や “おばけ” になっておいかけてっこをする
2. 子どもの姿の捉えと活動が生まれた発端及び根拠
 保育所の夏祭りでおばけやしきができ、そのおばけやしきに入って楽しんだことから、自分たちもおばけになって保育者をおいかけてたり、保育者から逃げたりして、一緒においかけてっこを楽しむようになった。
3. ねらい◎と内容・
 ◎保育者や友だちと一緒に体を動かして遊ぶことを楽しむ。
 ・友達とイメージを重ねて、“おに” や “おばけ” になっておいかけてっこをして遊ぶ。
 ・「おに（おばけ）だぞー」と言っておいかけてたり、「キヤー」と言って逃げたりする簡単な遊びのルールが少しずつわかって繰り返す。
4. 活動の概要

子どもの姿	保育者の受け止めとかかわり
10/17 (木) うさぎ (3 歳児) 組がかくれんぼをしているのを見て、A 児「かくれんぼしよー」と言う。うさぎ組 B 児「ぼくがおにだよー」、それを聞いた C 児が「おにだぞー」と言っておいかけっこをする。保育者も逃げていると、他の子も加わっておいかけてっこが始まる。	うさぎ組がしているのを “やってみよう!” と思い、保育者とやってみようとした A 児。A 児と B 児の言葉を聞いて、C 児は “おに” をイメージし、指で角を作っておいかけて。3 歳児のしていたかくれんぼとは違う、2 歳児らしい姿だと感じた。子どもの走るペースに合わせて保育者も一緒に走る。
10/21 (月) A 児「かくれんぼしよー」と言っておいかけっこをする。保育者と一緒に隠れると、D 児「おにだぞー」と指で角を作り “おに” になっておいかける。キラキラハウスなどに隠れながらのおいかけっこをする。「おにしようよ」「おうちににげよー」等と友達を誘いながら一緒に遊ぶ姿があった。「もう 1 かいしよ」と言って繰り返す。	17 日のおいかけてっこをきっかけに、友達と共通のイメージをもち、指で角を作り “おに” になりきっておいかけてっこをするようになる。友達を意識して遊ぶようになった姿であった。“繰り返したい” という子どもたちの気持ちを大切に、「もーいっかい」という気持ちに応え、繰り返し一緒に遊んだ。
11/7 (木) E 児が友達を誘い「おにだぞー」と言いながら、ログハウスへ行く。「もう 1 かいやろうよー」と言いながらログハウスに向かったが、誰もいなかった。保育者が逃げると、指で角を立て、「おにだぞー」と言っておいかけてっこが始まる。	友達を意識して、友達と一緒に友達をおいかけてようとしていた。ログハウスに誰もいなくなっていたので、保育者が「キヤー、おにだー」と言って逃げ、おいかけてっこを楽しめるようにする。
11/27 (水) うさぎ組のダンボールのおうちに	F 児はダンボールのおうちからおばけ

興味を示していたC児とダンボールのおうちを部屋に作ると、それを見てF児「おばけがくるよ」と言う。その言葉を聞いて「キャー」と言って逃げると、おうちの中にいる子が「おばけだぞー」と言っておいかけってくる。おばけになった友達がおうちに戻ると、逃げていた子は「おうちいこ」と言って部屋に戻り、おうちをトントンと叩く。するとまた、おうちからおばけになった子が出てきておいかけっこが始まるということを繰り返す。

12/4 (水) A児「あーぶくたったしよ」と言うのでみんなですると、それが繰り返し続く。
12/5 (木) 「みんなであーぶくたったしよ」と朝から言う。他の遊びをしたい子もいたので、やりたい子です。最後の「おばけのおとー」となるところでは「キャー」と言って逃げる。

をイメージした。F児のイメージを受け止め、保育者は「キャー、おばけー」と言って逃げた。周りの子もイメージを共有する。おうちからおばけが出てくるといいうドキドキ感も楽しんでいるようだった。繰り返しすることを楽しんでいたため、保育者も一緒に繰り返し楽しんだ。

最後に「おばけのおとー」となり、おいかけっこが始まるのが楽しいようで、「もう1かいしよ」と言って繰り返しした。また、“みんなでしたい”という気持ちが出てきた。友達と一緒にすることが楽しいと感じたのだと思った。

5. 考察

子どもの“やってみたい”“やりたい”“もう1かいしたい”という気持ちを大切にし、保育者が一緒においかけっこを繰り返して遊ぶことで、子どもたちもより“楽しい”と感じ、その楽しさを保育者や友達と共有することで、“またやりたい”という思いにつながっていったのではないかと感じる。おいかけっこを繰り返すことで、走り方も安定し速くなり、おにに捕まらないように距離をとりながら走るなど自分の思いのまま走れるようになったり、おにが来たらすぐに逃げることで、瞬発力が高まったりしたと考える。また、足の力がつき、高さのあるところからジャンプができるようになったことにもつながっているのではないかと考える。

6. まとめと今後の課題

おいかけっこをする中で「おにしよー」などと友達を誘って遊び始め、友達を意識して遊ぶようになっていった。“みんなでしたい”という気持ちを表す子もいて、“先生や友達と一緒に楽しいな”と感じられるようになっていったと感じた。おいかけっこだけでなく、ごっこ遊びなどでも友達を意識して遊ぶようになっていったと思われる。おいかけっこを通して培った足の力を他の様々な運動遊びにつなげていけるよう、保育者同士で子どもの様子を話しながら子どもたちとかかわったり援助をしたりしていきたい。また、友達と一緒に体を動かして遊ぶ楽しさを経験することで、より友達とのかかわりが深まるよう見守り支えていきたい。

3 歳児の実践

1. 中心となった活動 ジャンプができるよ！もっとしたい！
2. 子どもの姿の捉えと活動（場面）が生まれた発端及び根拠
一学期、部屋に置いてあるカラー積み木を、電車や飛行機などの乗り物に見立てて遊ぶことを楽しんでいた。二学期が始まると、いくつも並べたり、積み重ねたりし、また新たな用具も取り入れながら、そこに乗ったりその上を走ったりするような、運動的な遊び方もするようになった。自分たちで場をつくり、したいことに合わせて形を変化させながら、自由に遊んでいく中で、特にジャンプをすることに興味をもち、その面白さを感じ、繰り返しやっていくようになった。
3. ねらいと内容 ◎・・・ねらい ○・・・内容
◎自分から進んで体を動かして遊ぶことを楽しむ。
○自分たちで体を動かして遊べる場をつくり、いろいろな遊び方を試す。
○面白いと感じたことを繰り返ししたり、より面白くなるように遊び方を変えたりする。
4. 活動の概要 ～ジャンプをすることを繰り返し楽しむ姿から～

子どもの姿	担任の捉えと支え
<p>9/2 数人の子が、部屋にあるカラー積み木を使って滑り台をつくり出す。積み木が滑りにくい素材の為に滑ることはできないが、駆け下りるとスピードが出て面白いことを発見し、繰り返す。</p> 	<p>○自分たちで積み木を組み合わせてできたこの場に、満足感を感じている様子である。自由な発想でつくっていくのを見守っていく。 ○遊びが盛り上がったので、その場を残しておくことを提案する。子どもの降園後に、より遊びが広がるのではないかと考え、三面に穴の開いた立方体のカラーボックスを部屋に用意しておく。</p>
<p>9/3 登園後、昨日つくった滑り台の先にカラーボックスを2つ組み合わせる。滑り台から駆け下り、そのカラーボックスに上がって歩き、最後に床にジャンプをする。両足を揃えて跳ぼうとしているが、体ごと落ちたり、尻もちをういたりする子が多い。 繰り返し何度も挑戦するうちに、足に力が入るようになり、よろめかずに着地するようになる。「先生、見とって！」と見てほしい気持ちを表す。</p>	<p>○新たな用具があることに気付き、すぐに“これも使えそう”と感じたようである。積み木よりも高さのあるボックスを置いたことで、登る→跳ぶという遊び方になっていく。高さがあるためか、感覚的に両足跳びをしようとしている。着地の仕方（足の曲げ方、体の支え方）がわからないようであったので、担任も遊びに加わり、実際にやって見せる。 ○その気持ちを受け止めて、認めていく。</p> 
<p>9/4 カラーボックスを縦に二つ重ねて倍の高さにする。高くなり上に立つと腰を曲げて重心を低くとろうとする子もいる。「怖い」と戸惑う子も出てくるが、ずっと近くで見ている。初めは担任に体を預けるようにして跳ぶ子が多かったが、繰り返す中で少しずつ力を抜き、手は繋いでいても自分の力で跳ぶようになる。足で踏ん張れるようになり、転ぶことも少なくなってくる。</p>	<p>○昨日、一段のカラーボックスからジャンプして着地ができるようになってきたためか、より難しくしたいという気持ちを感じた。子どもたちがしようとしていることを見守る。 ○高くなったことで勢いがつき、着地する際に自分の体を支えきれないようである。「足にぐっと力を入れてごらん」と具体的に言葉をかけたり、担任が手を繋ぎ、様子を見て徐々に手を離したりしていく。</p>
<p>9/5 ボックスを縦に2つ重ねた物を3つ作り、それらを離れないようにくっつける。てっぺんに穴の面がくるように組み合わせている。着地した時の“ドン”という音や振動から「雷」を連想し、「雷です」と言ってジャンプする子が出てくる。それを聞いた周りの子も「雨です」</p>	<p>○昨日できるようになったことに自信を感じ、さらに難しくしようとしていると感じた。安全面に配慮し、ボックス同士が離れないように固定する。立つ面に穴があるために足を置く位置を考え、自分でうまくバランスをとっているようである。</p>

「雪です」と空から降ってくるものを言いながらジャンプし、そのうちに「雷の神様です」「雨の神様です」と自分が“神様”になったイメージでジャンプをし始める。一人でのジャンプから、友達と手を繋いでジャンプする子も出てくる。手を繋いでいる分、跳ぶタイミングが若干ずれることやバランスがとりにくいこともあり、マットの上で重なり合うようにぶつかってしまう。子どもたち自身も「せーの」と言いながら跳ぶようになり、跳ぶタイミングが合ってくる。



○繰り返しジャンプする中でイメージしたことがどンドンと膨らんでいったようである。何かになりきることを面白く感じ、恐怖心も薄いんでいる様子である。

○友達と手を繋いで一緒に跳ぶということに嬉しさを感じているようである。

○跳ぶタイミングが合うように、担任が「せーの」とかけ声をかける。

この日以降も自分たちで場をつくりながら、跳ぶ遊びを楽しんでいく。そして10月の運動会の種目にも高い所からジャンプする動きを取り入れていった。

10/18 運動会後には、「飛行機になって跳ぶ」と言って、より遠くまで跳ぼうとする子が出てくる。「ここまで跳べたよ」「次はここまで跳ぶけん」と自分の目標をつくって跳んでいく。

○今までは“高さ”を意識していた子どもたちであったが、次は“遠く”と跳ぶ距離も意識するようになった。“遠くまで跳んだ”という感覚が味わえるように、目印となるビニールテープをマットに貼ってみる。少し間隔をとって色の違う数本のテープを貼る。

5. 考察

この活動を通し、担任は意図的に「さっきより高い所から跳んだね」「さっきよりもっと遠くまで跳んだね」など、カラーボックスの高さや、跳ぶ距離を子どもたちが感じられるような言葉がけをしてきた。またテープを貼るなど、子ども自身も見て分かるような工夫も取り入れた。それらの支えが、「もっとできるようになりたい」という自分なりの目標をもち、更に体を動かしてやってみようとすることに繋がっていったのではないかと感じた。また、できるようになったという嬉しさを担任が受け止め、その頑張りやちょっとした変化(ステップアップしたところ)を具体的な言葉にして返していったことも、その子の自信や次への意欲に結びついていったように思う。

6. まとめ

いろいろなことに対して「やってみる」とすぐに興味をもつこの年齢の子どもたちに、安全を確保しながら、まずはしたいようにさせてみるということを大事にしてきた。初めは尻もちをつく、転ぶなどバランスを崩すような子が多かったが、繰り返しする中で自分で感覚を掴んでいき、そしてできるようになるということ、子ども自身が身をもって知っていったように思う。それが「次はこうしよう」「もっとこうしたい」という、より難しいことに挑戦しようとする意欲をもったように感じた。また、自分たちが考えたことやイメージしたことを自由に表しながら遊び進められたことが、満足感を味わい、楽しみながら様々な運動能力を身に付けていくことに繋がっていったように思う。

7. 課題

この事例では、“跳ぶ”“着地する”という動作に視点を当てているが、その他にも斜面を駆け下りる、走るスピードを調整する、高い所に登るために手足に力を入れるなど、全身を使って遊ぶ活動となった。今後も遊びの中で体をどのように動かしているのかということにも注目しながら子どもの姿を捉えていきたい。そして子どもたちが楽しみながら、様々な運動能力をバランスよく身につけていけるように、子どもたちから生まれてきたものだけでなく、担任からもきっかけづくりをしていくことも大事にしていきたい。

3 歳児の実践

1. 中心となった活動（場面）

床に描かれたケンケンパの輪やランダムに描いてある形を使って、自分なりのやり方を見つけて跳んだり、もっと跳べるようになりたいと挑戦したりしながら継続して楽しんだ遊び。

2. 子どもの姿の捉えと活動が生まれた発端及び根拠

運動会の生活で体を動かして遊ぶ楽しさを感じていた子ども達であったが、寒い時期に入り室内遊びが多くなり体を動かしていく姿が少なくなった。そんな中、一人の子が楽しんでいたケンケンパ跳びを大事に捉え、クラスみんなが楽しんでいけるよう床に丸などを描き室内でいつでも体を動かして遊んでいけるような環境をつくった。

3. ねらい ◎体を動かして遊ぶ楽しさを感じる。

内容 ○自分なりのやり方でする楽しさを見つけ、何度もやってみようとする。
○少し難しそうなことにでも挑戦してみようとする。

4. 活動の概要

子どもの姿	Tの環境の構成と援助
<p>11/28 ケンケンパができるようになったことが嬉しく、何度も担任に見せるA児。</p> <p>床に描かれた形に興味をもち、すぐに跳んでいく子ども達。形の中にジャンプできるよう丁寧に両足で跳ぼうとしたり、同じ形、同じ色をめがけて跳んでいこうとしたり、ケンケンと片足で跳ぼうとしたり、一人一人が様々なやり方で何度も何度も楽しんでいく。</p> 	<p>A児の姿から、床にケンケンパと輪を描くことで他の子どもも興味を向けるのではと考え、描いていく。様々な跳び方を楽しんでいけるよう、ケンケンパだけでなく、色々な形を色々なカラーテープでランダムに描いていき、さらに子ども達が興味向けていくような環境をつくる。</p> 
<p>11/29 朝の身辺整理が終わった子どもから、次々と楽しんでいく。</p> <p>子ども達が遊んでいるところへ、年中児が来て「これ何？」と床に描かれたものを見て言う。 その言葉に遊んでいた子ども達は、「ケンケンパだよ」と自分なりのやり方で跳んで見せる。 それを見て、すぐに年中児もやっていく。 年中児にとってケンケンパを跳ぶことは簡単なことのように、軽々と跳んでいく。また、その跳び方では物足りなさを感じ、次は逆から跳ぶなど自分達なりに抵抗感が感じられるようなやり方で跳んでいく。 この年中児の姿をきっかけに、子ども達も同じように逆から跳んだり、ケンケンだけを跳んだりなど、難しいやり方に挑戦していく。</p>	<p>「見とって」という子ども達の思いに十分に応えていく。楽しんでいるところや頑張ろうとしているところを認めていき、子ども達が楽しさや満足感が感じられるようにしていく。</p> <p>年中児との出会いを大切にしていける。年中児のすごさを伝えていき、子ども達が憧れの気持ちや挑戦しようとする気持ちがもてるようにしていく。</p> <p>難しいやり方に挑戦しようとする気持ちや、できた喜びを十分に感じられるよう細やかに子ども達を見ていき、認めていく。</p>

<p>11/28 以降毎日のように楽しんでいく。</p> <p>12/10 この日も朝から遊んでいく。</p> <p>ケンケンパが長くなることを知り、喜んで担任と一緒に円を描いていく。</p> <p>出来上がると、早速次々とやっていく。長くつながった『ケンケンパ』を跳ぶと、「やったあ」と飛び上がって跳べたことを喜んでいく。</p> <p style="text-align: center;">⋮</p> <p>その後も毎日のようにこの遊びを楽しんでいる子ども達である。</p>	<p>片足跳びができるようになったり、リズムよく跳ぶことができるようになったり、遠くへ跳ぶことができるようになったりと、毎日遊んでいく中で、子ども達の姿に変化を感じた。</p> <p>そこで、さらに挑戦したり、楽しんだりして欲しいと考え、これまでのケンパ、ケンパ、ケンケンパにケンケンパをつなげ長くしていくことを提案していく。</p> 
--	--

5. 考察

- ・3歳児にとって慣れ親しんでいる自分のクラスに、この時季いつでも体を動かして遊んでいくことのできる環境をつくることがとても大切であることを感じた。
- ・視覚的に表していくことで、めあて（円の中に着地しようとするなど）がもて、より意識して体を動かそうとするなど（手を大きく振ったり、足をバネのようにしっかりと屈伸させたりなど）全身を使っていく姿が見られるようになった。
- ・きっかけは一人の子どもの『ケンケンパ跳び』であったが、『ケンケンパ跳び』ができる、できないではなく、一人一人がどんなやり方に楽しさを感じているのか、どんなことを目指しているのかなどをしっかりと見てその子に応じた支援をしていくことが、“もっとやりたい”という意欲的な気持ちにつながっていったように思う。
- ・継続して遊んでいく子どもの姿から、担任が意図的に環境を変えていく（円を加えていくなど）ことで、さらにその遊びに面白さを感じ、何日も継続してやっていく姿につながると感じた。

6. まとめ

- ・身近にいつでもできる環境があることで、毎日の生活の中で何度も遊んでいく姿が見られた。体を動かして遊ぶことを繰り返すことで、しぜんにジャンプ力やバランス感覚が養われていったように思う。継続して遊んでいけるような環境構成や支援をしていくことの大切さを感じた。
- ・運動会の生活を経験し、運動機能が発達してきている中でのこの遊びとの出会いが、子ども達にとってよいタイミングだったようである。クラス全員の子ども達が興味を向け、また、楽しさを感じ毎日のように向かっていく意欲的な姿が見られた。このように子ども達の興味関心や発達を捉えた環境の構成していくことが大切であると感じた。
- ・順番にやろうとしたり、友達のしている姿に関心を向け、できたことを認めたり、担任に知らせたりなど、この時期にクラスみんなで遊んでいける環境があることで、友達へ向ける気持ちの深まりが感じられた。

7. 課題

- ・体を動かす楽しさを十分に味わって欲しいと思う一方で、“できるようになって欲しい”という気持ちを強く表し、指導的になっていくことがあった。一人一人の運動機能の発達を見極め、その子にとって必要な支援をもっと探っていく必要性を感じた。

4 歳児の実践

- 1・中心となった活動（場面）
園外のような自然環境の中で、子ども同士が刺激し合いながら、挑み、楽しんでいった崖登りの活動。
- 2・子どもの姿の捉えと活動（場面）が生まれた発端及び根拠
運動会の遊びを通して体を思い切り動かして遊ぶ楽しさを感じたり、自分なりのやり方で抵抗感のあることに挑んでいった子ども達であった。そういった経験をした子ども達に、『より心を躍らせ、のびのびと体を動かして遊ぶ楽しさを感じられるように』と願い、秋の園外活動として、様々なことが経験できる中学校(歩いて20分位)に継続して出かけることにした。中学校には、いろいろな自然物、起伏のある場所、開放感のある空間、子どもが登ってみたいくなるような様々な大小の崖などがある。
- 3・ねらい ◎全身を使って崖登りに挑み、達成感や充実感を味わう。
内容 ○足を踏ん張る、手で掴む、バランスをとるなど、全身を駆使して遊ぶ。
○友達に触発されながら、繰り返しやってみる。
- 4・活動の概要

《秋の自然の中で遊ぶ子ども達の姿から斜面や崖に登る遊びに主に視点をあてる》

10月21日 中学校へ出かける（1回目）

年少組と一緒に出かける。昨年度に経験している子はすぐに崖を見つけ崖登りを楽しんでいく。高さは2m位である。傾斜が急で砂地なので滑ってしまうが、あまり高くないので、4歳児にとっては、ほどよい抵抗感を感じる遊び場である。クラスの半数の子が楽しむ。一人一人のやってみようとする気持ちを認めたり、登れた喜びに共感したり、がんばる姿を励ましたりしていく。



10月29日 健康の森に出かける

年長児と一緒に山のふもとから歩いて上がる。途中で休憩をしたり、自然物を集めたりしながら、1時間30分位かけて上がる。年長児が山の斜面の上の方に野いちごを見つけ、斜面を登って採る姿を見る。野いちごの数が少なかったこともあり、高いところに登って採ってみようとする子はいない。

10月30日 中学校へ出かける（2回目）

3学年一緒に出かける。2回目ということもあり、「また、崖登りがしたい」「カマキリやカナヘビを捕まえない」「ドングリを集めたい」などの思いをもって出かけて行った子ども達。前回挑戦しなかった子がやってみたり、早いスピードで崖に登れるようになっていたりしていく。『A：崖登りの遊びが学級の中で広がっていったこと』、『B：簡単に登れるようになり、この場での崖登りの遊びにものたりなさを感じている子がいること』を感じた。

11月5日 佐世幼稚園との交流会 佐世神社での活動

神社までの道で、山の斜面に野いちごを見つける。斜面の上にある野いちご採りに挑んでいく。何度も滑り落ちてもやっていく。29日に年長児が斜面を登って採っていた姿を見た経験や野いちごを食べたいという思いが、子ども達がたくましく野いちごを採っていく姿に繋がっていったと感じた。また、神社の境内の斜面の登り下りを繰り返し楽しむ姿も見られた。



11月8日 中学校へ出かける（3回目）

これまでの園外活動での子ども達の姿や、30日の『A、B』から、同じ中学校の場でも1・2回目とは違う大きな崖がある場所(生き物がたくさんいる、さらに抵抗感がある崖)にも行くことを計画する。

子どもの姿	保育者の環境の構成と援助
年少組と一緒に出かける。 「カマキリがおりそうなところに行きたい」 「カナヘビつかまえない」と、生き物を探していたが、目の前の大きな崖に数人の子が登り始める。15m以上ある崖をどんどん登って	<ul style="list-style-type: none"> ・生き物がいる場所に行きたいという子ども達の願いと保育者のよりダイナミックに崖登りをしてほしいという願いから、グラウンドの大きな崖の場に行く。 ・高く急な斜面に自ら登っていく姿に感

いく子ども達。数人が登るとそれを見てさらにいろいろな子が登っていく。
「先生見て!」「おーい」「こんなところまで来たよ」「〇ちゃん、おーい」
どんどん高いところに登っていく。
登ったり下りたりを繰り返していく。下りるときにはお尻をつけ滑るように下りていく。
繰り返していく中で、登り下りする場を広げていく。



「あっ カマキリがおった」「カナヘビがおった」崖の上で生き物を見つける友達の声を聞いて、崖を登っていく子も出てくる。

「〇ちゃんががんばって」「手につかまって」と友達同士助け合って登る。



3歳児が崖登りに挑戦する姿を見て、崖登りを始める子もいる。

動する。崖登りの遊びをしっかりと支えるために、この場に保育者が位置し、保育者自身も崖に登ったり、崖の上から子ども達に声をかけたりする。崖に登りたい子、高いところに登っている子、どちらにもかかわれるようになるべく崖の中腹にいるようにする。

- これまで登る経験はしていても下りの経験はあまりなかった子ども達であった。下りる中で、滑る、体の傾け方を体感するなど『登る』だけではできない経験をしていた。
- 子ども達の認めてほしい思いにしっかりと応えていく。「手と足の力がすごいね」「やったね」などと声をかけたり、言葉だけでなく手を振ったりしてちゃんと見ていることを伝えていく。
- 崖に登ることをしなかった子が、興味関心のある生き物がいたことで登ってみようとする気持ちになる。崖登りをしながら一緒に生き物を探したり、登れたことを認めたりする。
- 子ども同士が助け合い、励まし合いながら登る姿が見られる。そういう姿を見守り認める。
- 3歳児には負けていられないという気持ちが感じられた。「さすが、ばらさんだね」と認めていく。

5. 考察

- 子ども達の実態や興味関心を踏まえ、体を動かしたくなる環境、挑んでみたくなる環境に出会わせていくことが大切である。そのためには、保育者の環境を捉える力が必要である。
- 一人一人をしっかりと見て、その子に応じた認め方をしていくことが大切である。
- モデルとなる年長児の存在、「〇ちゃんみたいにやってみよう」と思える友達の存在、年下の友達のがんばる姿などが子どものやる気に繋がっていると思う。
- 継続して園外に出かけていくことで経験が広がっていく。それは同じ場であるときもあればそうでないときもある。その中で、子どもの経験がどう繋がっているのかを捉えていくことが保育者の環境の構成や援助に繋がっていく。
- こんな活動をすれば運動能力が伸びるという見方ではなく、多様な経験ができるような保育者の環境の捉え方、保育を見通す力が必要である。

6. まとめ

- 崖登りの遊びを通して、「登れた」という思いから“自信”や“自分ってすごいという自己肯定感”をもつことになった。また、やってみようとする意欲にも繋がっていった。
- チャレンジする気持ち、もっと高いところはどうなっているのだろうという好奇心、もっとしたい、次はこうしたいという探究心が培われたと思う。また、友達同士が刺激し合い、助け合いながら取り組んでいく姿から、仲間意識や友達を思いやる気持ちが育った。
- “夢発見プログラム幼児期版 観点3の中に 4歳児「様々な場所で身体のいろいろな部分を動かす」とあるが、この事例からこのことが言えると思う。

7. 課題

- この時期に中学校に3回でかけたが、もっと回数を重ねていけばよりたくさんの子が大きな崖に挑んでいったのではないかと思われる。天候や行事等があり、実現できなかったことが反省点である。子どもの遊びの内容に合わせて、さらに継続して出かけることができるように、柔軟に計画(保育計画、園外活動計画)を立て直していく必要がある。

4 歳児の実践

.....子どもの様子

.....環境の構成と手立て

1. 中心となった活動（場面）.....ドッジボール
2. 子どもの姿の捉えと活動（場面）

- ・10月の運動会を経験し、身体を動かして遊ぶことを楽しんだり、生活の中でクラスの友達と力を合わせたりする姿がより見られるようになった。
 - ・クラスみんなでする活動を心待ちにする姿が見られるようになってきた。
- ⇒クラスの仲間意識、“みんなですると楽しいね”の気持ちがふくらんできている。

○11月13日

男児3名「ドッジボールだよ」と互いにボールを投げ合っている。

さらに男児6名が興味を示し加わる。

とても興味を持って聞く。ほとんどのCがルールを理解していなかったが、とても楽しんだ。

クラスで集まると、違う遊びをしていたCも「ボールのやつやりたい」と言う。

ルールを理解しきれないCもいたが、みんなですることやその場の雰囲気を楽しんだ。

ビニールテープでコートを作ることで遊びがよりおもしろくなるかもしれないと考え、コートを作る。

『ここが内野』『当たったら外野に出る』など最低限のルールを伝える。

様子を集まりの場で紹介。

多くの子が興味を持っていと捉え、みんなでドッジボールをしようと提案。

クラスで共有する活動として、ドッジボールを取り入れよう！

- ・室内でも身体を思い切り動かして遊んでほしい。
- ・チームの友達と力を合わせて頑張る楽しさを味わってほしい。
- ・“投げる、よける、ボールを受け止める”といった見つけた遊びの中ではあまり経験していなかった動きを経験してほしい。

3. ねらいと内容（運動的な視点）

○友達と一緒に思い切り身体を動かして遊ぶことを楽しむ

- ・コートの中で走ったり、ボールをかわしたりする。
- ・片方の手で相手を狙ってボールを投げたり、内野から外野にパスをしたりする。
- ・相手が投げるボールをよく見て受け止める。

4. 活動の概要

○11月14日～

毎日、登園すると友達を誘い、繰り返し楽しんでた。勝ち負けにはこだわらず、ドッジをすることが楽しいようだった。

少しずつルールを理解し、自分たちで教え合いながら遊ぶ姿も見られるようになった。

- ・クラスみんなでする場所と時間を保障した。
- ・仲間に入って一緒に楽しんだ。
- ・勝ったチームに花丸を付けていく表を作り、掲示した。

・『勢いをつけて片手で投げる』『相手をよく見て投げる』『よく見てボールをかわす』といった動きを意識しながらやるようになった。

・一緒にする中で片手で投げたり、外野にパスしたり、ボールを受け止めたりして見せ、Tの動きをCがどう受け止め、どのような姿を見せるのかを見ていった。

・「お話しよう」と声をかけ合って作戦を立てたり、「今日は青チームが2回勝った」「負けたけん明日は頑張る」など、勝ちたい気持ちを強く表すようになった。

・遊んだ後に必ず話し合いの時間を設け、「当たらないようにするにはどうした?」「どうしたらよく当たった?」などと話すことで、“次はこんな風にするとうまいな”と考えることができるようにした。

○12月上旬頃～

・誰かが始めていると自分から仲間に入り、クラス全員で遊ぶ姿へと変わった。また、その中で自分なりのめあてを持って遊ぶようになった。
・意識しながら片手で投げるようになったことで、スピードが増し、よく当たるようになった。
・身体全体を使ってボールを受け止めることができるようになった。
・何度かすると満足して次の遊びに移る姿が見られるようになった。

・誘い合って自分たちだけで遊びを進めていく姿、困った時に自分たちで解決しようとする姿を大いに認めた。
・作戦をたてたり、掛け声を合わせたりして力を合わせる姿を大いに認めた。

5. 考察 (運動遊び・運動発達に有効だった指導性)

- ・子どもの姿を見極めたり、興味・関心の向きを捉えたり、適時を捉えて環境構成を行ったことで、意欲的に取り組む姿が見られたのだろう。
- ・遊びの後で話し合いをしたり、子どもの気づきを広めたりしたことが、子ども達が自然と意識してやってみるようになり、身体の動きが変わっていったことにつながった。ボールのスピードが増したり、受け止めることができるようになったりと技術が高まったことで遊びがより楽しくなり、めあてを持った遊びとなり、継続したのだろう。

6. まとめ (この活動を通して培われた心情、意欲、態度)

『好きな遊びに没頭する』『当てられても我慢したり泣かずに頑張る』『作戦をたてたり「エイエイオー!」をしたりして、チームの友達と力を合わせる (団結力、チーム力)』『自分たちで技術面を高め合う』『みんなが楽しく遊ぶためルールを守る』が培われたと考える。

7. 課題

- ・ドッジボールで経験することはどんなことかをよく見て、分析を深めていく。また、ここでの経験を今後どのようにつなげ、生かしていくかをしっかりと考えていく。
- ・遊戯室は全クラス共有のスペースである。どの遊びも充実するように、使い方を再度話し合い、各クラスの担任が連携を取り合っていく。
- ・保育者が主になりすぎていた部分もあったので、この反省を生かし、より子どもに気付かせるような保育者のかかわりを大切にしていけるようにしたい。

5 歳児の実践

1. 中心となった活動(場面)

リレーの遊びをする中で様々なことに気づいたり、自分達のルールを創っていったりしながら、よりリレーの遊びを楽しむようになっていった活動

2. 子どもの姿の捉えと活動(場面)が生まれた発端及び根拠

年中児のしているリレーの遊びに関心をもち、そこにクラスの半数が加わっていき、繰り返し走ることを楽しんだ。翌日から 5 歳児だけでのリレーの遊びが始まった。9 月に入り跳び箱や長縄跳びに挑戦して遊び、体を動かして遊びたい気持ちが高まってきていたからこそすぐにリレーに関心をもったと考えた。

昨年度、保育所・幼稚園共に 2 チーム対抗のリレーをしている。また、年中児がハチマキとバトンを持って楽しそうに走る姿を見て、昨年度の経験や楽しかった記憶を思い出したことから、このリレーの遊びに強く魅かれたと考えられる。

3. ねらい

◎友達と力を合わせたり、励まし合ったりしながら体を動かして遊ぶ楽しさを味わう。
内容

○思い切り走る心地よさを感じる。

○友達と競ったり、相談したりしながら自分達のリレーのルールを創っていく。

4. 活動の概要

日にち・子どもの姿	環境の構成と援助
<p>9/18 年中児に混じってリレーの遊びを楽しむ 築山から走り下りる、ログハウスにタッチする、同じ色のハチマキの人にバトンを渡す、友達と一緒に走るなど、それぞれに楽しんでいる内容は様々である。</p>	<p>・子ども達がいい表情で繰り返し走っていたことを認めた。リレーのやり方について話し始めたので、していなかった子にも様子が伝わるように丁寧に聞くようにした。次の日も続けて遊んでほしいと思い、部屋にバトンやビブスがあることを伝え、よく見える場所に置いた。</p>
<p>9/19 登園するとすぐにバトンを探し、みつけると園庭に出てリレーを始める 担任対子ども対決を繰り返し楽しむ。担任や友達に誘われて庭に出るが、リレーを見ながら遊具で遊ぶ子もいる。</p> <p>《小学校の運動会のリハーサルを見る》 見学後、校庭のトラックで思い切り走らせてもらおうと、すぐに園に帰って走りたい気持ちを表した。小学校のようにトラックを園庭に書き、リレーが始まる。A 児は「ゴールテープや笛を用意し、B 児は「走るのを待つ人はここで待とう」と場を決め、声をかける姿が見られた。</p>	<p>・走る楽しさ、競う楽しさを味わってほしいと思い、担任も本気を出しながら対決をしていった。</p> <p>・見る経験も大事にしたいと考え、時折声をかけながら今のありのままの姿を受けとめることにした。</p> <p>・共通のイメージをもつきっかけにしたい、モデルとなる姿に触れさせたいと思い、リハーサルを見に行った。</p> <p>・子ども達のやりたい気持ちを支えたいと思い、急いで園に帰った。給食後の時間も使って時間の許す限りみんなでリレーを楽しむ時間をもった。リレーをしながら子ども達が気づいたことを周りに知らせるような言葉をかけた。</p>
<p>9/20</p>	<p>朝からトラックのラインを引き、自分達でリレー・休憩・リレーと流れを作っていく。一生懸命走っている友達の姿を見て、応援団ができる。</p>
<p>9/26 いろいろなことに気づき始める 人数の少ないチームが何度も走ることに気づき「疲れた」と訴えてきた。友達の言葉を聞いて、自分達でチームを入れ替わり、偶然に 2 色で同じ人数に分かれることができた。すると自分と走る相手が分かり、より楽しさが増した様子だった。</p>	<p>・子ども達の気づきに共感しながら、どうするのいいのか投げかけた。友達の気持ちを分かかってチームに加わっていったことも認めた。人数が同じになったことで走りやすさや対決しやすさを感じた具体的な内容を子ども達から引き出すように言葉をかけた。</p> <p>・終わりの会で、翌日中学生との交流があることを知らせた。子ども達の刺激になってほしいと考え、「中学生と対決をしよう」と提案した。</p>
<p>9/27 朝から中学生との対決を楽しむ</p>	<p>・多くの子が普段より早く登園し、誘い合っ</p>

に登園する「何時に来る?」「来るまで練習!」と自分達で呼びかけていった。エンドレスのリレーが続く中、担任の言葉がけで集中して勝負をし始める。

《中学生との交流会・リレー対決》

中学生に対決をしたい思いを自分達の言葉で伝えると、快く受けてもらえた。初めは赤 VS 青 VS 中学生、2回戦はずらん VS 中学生で勝負する。

10/1「順番や色が分からない!」「次は誰?」と言って、リレーが中断する

ビブスを受け取るとすぐに「前の年長さんも着ていた!」と言って喜んで着た。「番号が書いてあるけん、順番で並ぼう!」とチームごとに並び出した。走ってみると「これって、すごくいいね」「やりやすい!」「同じ番号の人と走って事だね」とすっかりとした様子で繰り返しリレーを楽しんだ。

10/2以降

「勝敗にはこだわるけど、どちらも勝てるチームをつくらう」とチーム分けをしていった。“本気で速く走るための方法”を考えるようになり、運動会前にはチームごとに相談をし、バトンパスの練習をしたり、方法を書いた巻物をバトンの筒に入れて走ったりしていた。また、給食後や雨の止み間など、走れる時間を見つけては、みんなで誘い合ってリレーを楽しむ姿が見られた。

てリレーを始めていった。子ども達の意欲的な姿を捉えた。

・担任から「勝負するなら1人1回の真剣勝負をしよう!」と提案した。

・中学生との対決では、勝ちたい気持ちから大声を張り上げて応援する姿が見られ、その応援が力になることを知らせた。



・子ども達が問題を解決し、よりリレーに面白みを感じて遊ぶようになるためには今だ、と思い「ビブスっていうものがあるよ」と子ども達に見せた。

・子ども達が自分達のルールを共通のものとして気持ちよく受けとめてしているので精一杯応援していった。一緒に勝った喜び、負けた悔しさに共感するようにした。



5. 考察

- ・リレーが始まってすぐにビブスの話をした。初めからリレーを形づけたい思いが自分の中にあったと反省している。その後、ビブスを出すことでの子どもへの影響をよく考えながら、子ども達の困り感や必要感を感じたタイミングで再度ビブスの話をした。そのことでより子ども達の創ったルールが目に見えて分かりやすくなり、遊びがより盛り上がったように感じた。
- ・年上の人達と接することで、いろいろなことに気づいてほしいというねらいをもち、小学校の運動会のリハーサル見学に出かけたり、中学生との交流の機会にリレー対決を挑んだりした。このような年上の人に触れる機会を積極的につくることも大切な環境の構成であると感じた。
- ・運動会以降もゴールテープ、バトン、ライン引きを置いておいたことで、自分達でより大きなトラックを書いてリレーをしたり、固定遊具を使ったリレーを考えたりしながら楽しむ姿があった。また、園外活動にバトンとゴールテープを持って行き、出かけた先でもリレーをして楽しんでいった。行事が終わるとすぐに物を片付けるのではなく、子どもの思いに沿った物的環境を整えていくことの大切さを学んだ。

6. まとめ

- ・子ども達は遊びながら自分達の気づきや困ったことに立ち向かい、工夫したり、折り合いをつけたりしてリレーを自分達のものとしていった。そういう過程を大事にしたことで自信が生まれ、より達成感を感じ、意欲へとつながることが分かった。
- ・初めから担任がチーム分けをしたり、ルールを与えたりせずに子どもがどのようなことに興味をもち、どのようにしていくのか、今までの経験をどう生かしているのかを捉えることが必要である。そのためにはしっかりと見通しとねらいをもった生活の構想を組み立てることが大事だと感じた。

7. 課題

普段からしている遊びや行事を振り返り、経験している内容を見つめ直していくことの大切さを改めて感じた。これからも子ども達一人一人の経験している内容を多方面から捉えていく必要性を感じている。

4, 5歳児混合学級の実践

(年中児8名 年長児4名)



1. 中心となった活動 「先生、赤土の丘へ行こうよ！！」
2. 子どもの姿の捉えと活動が生まれた発端及び根拠・・・昨年の年長児への憧れより

4/15

「先生、赤土の丘へ行こうよ！！」
 ・遊び場がどうなっているのか
 気になる・続きがしたい

← 昨年の年長児がリードしながら赤土の丘に“秘密基地”を作り、その場で継続して遊びを楽しんできたことを、今年度代わった担任に得意気に話してくる。子どもの気持ちをしっかりと受け止め、保育者自身もわくわく感を表した。

3. 保育者の願い (ねらい)

子どもたちの気持ちに添いながら、子どもたちが大事にしている場に今年度も継続して出かけることにした。継続して活動することによって、

- ① 赤土の丘では、身体のいろいろな部分を動かして思いっきり遊ぶことができる
- ② 昨年度の経験を活かしながら友だちと一緒に経験を積み重ねていくことができる。
- ③ 季節を感じながら食を通して、健康な育ちを期待することができる。

4. 活動の概要

*春だから きっと

・4/15 ~5/17 「竹の子み一つけた」「竹の子食べたいな」「掘って持って帰ろう」「竹の子が動かないから、先生の背中に乗って押すかー」「前のゆりさんみたいにやってみよー」と試行錯誤しながら力いっぱい掘る。「あっちにもあるかもしれん」と山を登ったり、降りたり粘り強く探索する。(5歳児)
 ・竹の子が見つからずアスレチックで遊ぶ。友だちと一緒に何度もやってみる(4歳児)
 ・5/10 ~「この葉っぱでお餅(柏餅)やよもぎ団子ができるが~」「作って食べよう」「いろんなとこ探していっぱい集めよう」山中を目的を持って探索する。

・12/2 「赤土の丘に行けば木があるから取りに行こう」とツリーにするための木を探しに更に奥に入る。「私も切りたい」「ぼくが最後まで切る」と諦めずに切り倒す。みんなでかついで園に持ち帰る(5歳児)
 ・12/20 「ソリ滑りに行こう」「こっちの坂で滑るよりも、赤土の丘の方が絶対おもしろい」スリル満点。何十回も坂を登っては滑り下りる。だんだん高さを上げ、挑戦意欲を燃やす。

*冬だから きっと

*夏だから きっと

・6/4 「寿会さんに笹巻き作りを手伝ってもらおうよ」「笹があるけど、この葉っぱでいいのかわ、これくらいの大きさでいいのかわ寿会さんに聞いてみよう」笹巻きに使える笹の葉があるか、行き慣れている場所に地域の方に案内する。急な坂道は手をつなぎ引いてあげる。
 ・「黄色いイチゴ食べたい」「あの下にあるのも採りに行ってくる」崖を下りたり枝を引っ張ったりして採る。
 ・7/10 「七夕の笹を切ってこよう」「僕たちが見つけてくるけん待ってって」(5歳児)

・10/29 交流会で他園の友だちに自慢の遊び場を案内し、得意そうに教える。(5歳児)
 ・木の実木の葉をいろいろな場所で拾い集め、お店屋さんごっこに使って遊ぶ。
 ・11/14 「こっちにも道がある」「行ってみよう」と新たな道を見つける。(4歳児)
 ・「上にもあるから行ってみよー」と斜面にある冬イチゴを食べるためによじ登って採る。(4歳児)

*秋だから きっと

年間を通して、四季の移り変わりを身体や心で感じながら「やってみたい」「もっとやりたい」「何とかしたい」といった子どもたちの願いに添いながら、子どもたちが実現するために試行錯誤したり挑戦したりする姿をしっかりと支え、納得するまで取り組ませた。

*ぼくたちの赤土の丘だから

- ・もっと楽しいことを見つけたい
- ・もっと何かがあるはず
- *好奇心と探求心のふくらみ

12/7

大きな木・発見！！



<p>子どもの姿 12/17</p> <p>A児「あの大きい木のところに行きたい」と勇気を出してどんどん走って行く。</p> <p>B児「登ってみよー」と大きな木に登ったり、飛び下りたりする（5歳児）</p> <p>C児「ぼくも登りたい」と何度も何度も挑戦する。（4歳児）</p> <p>D児「滑るのも面白いね」斜面をお尻で滑る方法を見つけて試す。（4歳児）</p> <p>E児「滑らんように登れたよ」斜面を駆け上がり、滑らないよう踏ん張ったりして上がる。</p> <p>F児「ベンチみたいだよ」と倒れている木にバランスをとりながら座る。</p> <p>A児「ここは公園みたいだね」</p> <p>C児「名前があるといいね」「考えよ！」</p> <p>「楽しいランドは?」「ぴかぴかランドは?」「おもしろいランドは?」「みんなが言ったことをぎゅーっとぎゅーっとまとめて・・・世界で一つしかないところだね・・・“世界で一つの楽しいランド”は?」</p> <p>「それいい!」「それにしよ!」</p> <p>『世界で一つの楽しいランド』に決まり!!</p>   	<p>保育者の援助</p> <ul style="list-style-type: none"> ・新たに発見した意欲を十分に認め、嬉しさに共感する。 ・今まで遊んだことのない場所でそれぞれが遊びを見つけ楽しむ姿を見守ったり、一緒に遊んだりする。 ・自分で何とかして登ろうとする姿を支え、挑んでいく気持ちが他の子の刺激になるよう言葉をかける。 ・友だちの真似をして登ってみようとする勇気を認める。できなくて悔しい気持ちを支え次への意欲につなげる。 ・自分たちで発見し、さらに愛着を持った赤土の丘での遊びに広がりが見られた。子ども達の意欲的な活動の姿に大きな育ちを感じ、その思いを個々に伝える。 ・思いっきり楽しみ、満足感でいっぱいの子どもたちと思いを共有する。 
--	---

5. 考察（運動的な遊び・運動発達に有効だった指導性・環境構成）

四季を通して出かけることによって子どもたちは赤土の丘に愛着をもつようになった。その中でもっと知りたい、遊びたい、やってみたいという子どもたちの弾むような心を大切にしてきた。そうすることによって、赤土の丘の自然環境を活かしながら走る、歩く、立つ、登る、滑る、這う、押す、引く、掘る、倒す、乗る、渡る、ぶら下がる、持つ、跳ぶ、くぐる、はねる、つかむ、運ぶ、押さえる、支えるなど様々な動きを経験することができた。また、めあてや見通し、意図を持ってその場に出かけることで、しっかりと経験させることができ、運動発達にとって有効であったと考える。

6. まとめ（活動を通して培われた心情、意欲、態度）

《4歳児》繰り返し行く中で、5歳児に憧れを抱き真似てみたり、自分から挑戦してみたりするようになった。運動的な遊びが苦手な子どもたちが多く見られていたが、この活動を通して身体のいろいろな部分を動かす楽しさを、自らが進んで十分に味わうことができた。その経験が自信につながり、意欲的に生活するようになった。

《5歳児》昨年の経験を基盤に見通しをもちながら遊びをリードすることができた。その中で自分の力を試したり粘り強く続けたりする姿がたくさん見られるようになった。この姿は4歳児にとって「ゆりさんってすごい」「ゆりさんみたいにできるようになりたい」という憧れとなった。これは5歳児にとって大きな自信となった。

7. 課題

赤土の丘で培われた運動の発達を園での生活にどうつなげ、どう発揮させていくのか、年間指導計画や期案などに組み入れ、その環境の構成と援助のあり方を探っていきたい。

雲南市の子どもたちが経験した 「名人によるプログラム」

= 実践事例 =

〘身体教育医学研究所うんなん〙による 「わくわくうんなんピック」「運動遊び」の実践

- 1 親子でふれあって一緒に遊ぼう! プログラム
 - *3歳児4歳児5歳児と保護者
 - 1 親子でタッチ遊び
 - 2 全身を使った運動遊び
 - 3 からだほぐし
- 2 おじいちゃん、おばあちゃんと楽しくふれあい遊び! プログラム
 - *0歳児1歳児2歳児と祖父母
 - 1 手遊び
 - 2 一緒に動こう
 - 3 まねっこ遊び
- 3 「わくわくうんなんピック」プログラム
 - *チャレンジブースのポイント

〘小川秀樹委員(JFAアカデミー熊本宇城コーチ)〙による 「運動遊び」の実践

道具や用具を使った運動遊び年齢別プログラム

- *3歳児クラス
 - 1 追いかっこ
 - 2 いろいろな動きにチャレンジ
- *4歳児クラス
 - 1 手つなぎオニ
 - 2 人数ゲーム
 - 3 仲間と協力
 - 4 ボール遊び
- *5歳児クラス
 - 1 オニごっこ
 - 2 ゲート通過と通せんぼ
 - 3 積み木を使った遊び
 - 4 ボールを使った遊び

親子でふれあって一緒に遊ぼう！

スタッフ：西川・安部 (研究所)

筒井・細木・安部(幼稚園)

日時：平成 24 年 7 月 5 日(木)午前 9 時 00 分～午前 9 時 40 分

対象：雲南市立幼稚園 3 歳児 6 名 4 歳児 4 名 5 歳児 9 名 保護者 19 名 合計 38 名

会場：雲南市立幼稚園遊戯室

【活動のねらい】 子ども：親子でふれあいながら遊ぶことによって、意欲を持って取り組む姿勢を育む

大人：親子で一緒に体を動かすことにより、絆を深める機会にする

参考文献：①幼児期運動指針
 幼児期運動指針策定委員会
 文部科学省
 ②子どもの運動・遊び・発達
 運動のできる子どもに育てる
 株式会社 学研教育みらい
 宮丸凱史

	運動遊びの主な内容	運動遊び・活動の様子		ねらい	動きの要素 (幼児期運動指針から)	注意点
		◆先生の挨拶	◆本日の内容説明			
20分	1、はじめの会 2、お話を聴く	◆ 子どもたちは“遊び”が大好き！！	◇ 体を動かして遊ぶことの大切さを知り、家庭での継続に なげる			
5分	3、親子でタッチ遊び	◆ ふれあいからだほぐし ・体側伸ばし、ももうら伸ばし ◆ 体のいろいろな部位を合わせる ・手、肘、肩、ほほ、ひざ、足、おしり	◇ 心と体をほぐして、活動を行 いやすいように準備をする		◇ 用具などを操作する動き ・引く、引っばる ・押す	
10分	4、全身を使った運動 遊び	◆ 親子でジャンプ ・手をつないでジャンプ ・虫どりジャンプ(大人が様々な高さに手 をだしジャンプして手にタッチする) ◆ ロボット歩き ・大人の足の上に子どもが足を乗せな がら、いろんな方向に歩く	◇ 親子でコミュニケーションをと りながら遊びのバリエーションを 広げる		◇ 体を移動する動き ・跳ぶ、跳びあがる ◇ 体のバランスをとる動き ・歩く ・とまる	◇ 発達や年齢・個人差等考慮した うえで、保護者と園児がスムーズに かかわれるように注意深く見守った り、声をかけたりする。
5分	5、からだほぐし	◆ 肩たたき・肩もみ・腕マッサージ	◇ ゆったり落ち着いた中で体を ほぐす			

おじいちゃん、おばあちゃんと楽しくふれあい遊び！

日時：平成 26 年 11 月 21 日（金）9 時 00 分～9 時 40 分

対象：0～2 歳児 42 名とその祖父母 合計 84 名

会場：雲南市立子ども園保育所遊戯室

【活動のねらい】子ども：祖父母と一緒にからだを動かして楽しく遊ぶ

祖父母：家庭で継続的にふれあいがながら遊べるように情報提供する

スタッフ：西川 安部

スタッフ：保育所担当の先生

参考文献：①0～5 歳児の運動遊び指導百科

著／早稲田大学教授/医学博士 前橋明 ひかりのくに

②保育所保育指針解説書

厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課

③幼児期運動指針

	運動あそびの主な内容	運動あそび・活動の様子	ねらい	動きの要素（幼児期運動指針から）	注意点
5分	1、座ってできる運動遊び	◆1 本橋ごちよこちよ 手・お腹・脚などからだのいろいろな部位でおこなう ◆げんこつ山のたぬきさん むかいあって一緒に指先を動かして、最後ははらめっこをする	◇一緒に動き、コミュニケーションを図る	◇指先の動き ・手を伸ばす ・つかむ ・つまむ	◇指先を使った小さな動き きから、徐々に大ききな動きに移行する
15分	2、立ってできる運動遊び	◆リズムにあわせて動く （あたま・かた・ひざ・ぼん♪の歌にあわせて動く） ◆トンネルあそび （からだでトンネルをつくってぐる） ・いろいろなトンネルを作り回していく ・2～3 ペアが一緒に大きなトンネルをつくる	◇からだの部位を認識しながら、コミュニケーションを図る	◇リズムに合わせた動き ◇体を移動する動き ・這う ・くぐる	◇近くの人とぶつ からないように間隔を広くとり行う
10分	3、全身を使った運動遊び 	◆まねっ子あそび ・ロボットあるき（祖父母の足の上に子どもが乗りながら歩く） ・だるまさんになろう（祖父母の膝の上に子どもが座り、だるまのようにゆれるが倒れないようにバランスをとる） ・おいもごころ（寝ころぶ子どもを転がす） ・かきどりジャンプ（祖父母が手を様々な高さに手をだし、子どもが手にタッチをする。0 歳児はボールを目印にして様々な高さに手を動かす）	◇季節の野菜など身近にあるものを想像しながら、様々な動きを経験する	◇体のバランスをとる動き ・転がる、転がす ・寝ころぶ ・座る ◇体を移動する動き ・跳ぶ、跳びあがる ・歩く・とまる	◇祖父母の体力を考慮して、急な動きの変化は行わないようにする 
5分	4、からだほぐし	◆深呼吸、背伸び、四肢をゆっくり伸ばす	◇呼吸を整えて気持ちを落ち着ける	◇体のバランスをとる動き ・立つ・座る	
5分	5、お話を聴く	◆実施した遊びの効果や家族のふれあい遊びの大切さについての話聴く	◇ふれあい遊びの効果を理解し、家庭での継続につなげる		



わくわくうんなんピック

(運動能力・体力測定)



園

月 日 ()

5歳児： 名 4歳児： 名 スタッフ 保育所：数名 ()
 3歳児： 名 合計： 子どもの政策：名 ()
 スタッフ集合時間 8:30 研究所うんなん：名 ()
 場 所： 地域運動指導員：名 ()

ねらい

- 子 ども ①楽しみながら、全力で取り組むことをめざす
 ②わくわくうんなんピックを通じて、体をつかった遊びへの興味を高める
- スタッフ ①調査が正しく実施されるように配慮する

時 間	内 容	環境づくり等	子どもの動き	スタッフの動き	職員の動き	備 品
9:00 9:20	園出発 着		トイレ、整列	・測定、チャレンジブースを設定する		
9:30~ 9:45	はじめの挨拶 準備運動	進行：事務局 挨拶：園の先生 担当：研究所うんなん	・班ごとに並ぶ	・担任は、子どもの様子を観察する	・子どもと一緒に体操をする	記録用紙 音楽
	うんなんピック説明	(スタッフ自己紹介) 担当：研究所うんなん	トイレ・水分補給 ・チームごとに並ぶ	・スタートの場所とコース説明	・園児引率 チームごとに並べる	
9:45 ~11:00	うんなんピック	 25メートル走  立ち幅跳び  ボール投げ  跳越くぐり  バランス歩行	・数人のグループで活動する ・リーダーを決めておき、みんなと協力してアトラクションを実施する	・コーナーにスタッフ1名(測定者)を配置する ・楽しく遊ぶための約束をする ・グループの職員と協力して測定を行う	・グループ引率 ・子どもたちが積極的に取り組めるよう声掛けをしたり、サポートしたりする	資料参照 記録用紙
11:00~ 11:15	おわりの挨拶 メダル授与	進行：事務局 挨拶：園の先生 担当：スタッフ全員	・整列をして園児みんなであいさつをする メダル ・お別れに参加者とハイタッチをする	・出口前で子どもたちとハイタッチをする	・出口前で子どもたちとハイタッチをする	
11:40	バス発					

- その他 園児はガムテープで名前を付ける(園で 事前に配る)、園児ははだしで測定
 スタッフも名札を付ける：ガムテープ、マジック準備(子ども政策)
- 準 備 ロープジャンプ用縄(研究所うんなん 時間があれば使用)、救急道具(各園・所)、ハンカチまたはタオル・水筒(園児)

チャレンジブースのポイント

名称	ねらい	環境の工夫	援助の工夫
まとあて	投げる	<ul style="list-style-type: none"> ・投球回数を増やすため多くのボールを使う ・ボールの硬さ、重さ、大きさを変える ・遠くになげるため、的は高い位置に設置する 	<ul style="list-style-type: none"> ・投げる動作で、脚と手が同時に出る場合は、利き手で投げるための初期姿勢を伝える
水たまりジャンプ	両足跳び、両足着地	<ul style="list-style-type: none"> ・手作りの輪にすることで、大きさや形をさまざまなものにする ・輪の配置は、柔軟に変える 	<ul style="list-style-type: none"> ・「けん、ぱ」の声かけをタイミングよくおこなう
動物歩き	四肢によるバランス	<ul style="list-style-type: none"> ・体格を考慮して、配置を変える 	<ul style="list-style-type: none"> ・四肢でバランスをとりながら移動するよう声かけをする
フラットマーカ	脚の運び(ステップワーク)、バランス	<ul style="list-style-type: none"> ・様々な色を使って、ステップのバリエーションをかえる ・歩幅を考慮して、配置する 	<ul style="list-style-type: none"> ・素早く脚を運ぶよう声かけをする
くもの巣くぐり	またぐ、くぐる	<ul style="list-style-type: none"> ・ゴムひもの間隔を変えて、難易度を調整する 	<ul style="list-style-type: none"> ・くもの巣をイメージするような声かけをする ・くぐりぬける姿勢をさまざまなものにできるよう声かけをする
トンネルくぐり	からだを縮めて小さく動かす はう	<ul style="list-style-type: none"> ・トンネルの高さを変える ・トンネルの通路を曲線にして、視覚の変化をつける 	

1 追いかっこ

やり方:

- ・大人に捕まらないように子どもたちは逃げる
- ・捕まった友だちを見つけたら、他の友だちが助けてあげる

バリエーション:

- ・大人が逃げて、子どもが捕まえる

狙い:

- ・大人と一緒に遊びたい、走りたい、という欲求を満たす
- ・捕まえる=抱っこする ⇒ 大人と子どものふれあい
- ・簡単なルール子どもたちが考えずに動けるようにする
- ・友だちを助ける ⇒ 心の発達、色々な動きの経験につながる(ひっぱる、握る、揺らす、つかむなど)



2 色々な動きにチャレンジ

やり方:

- ・新聞紙を広げ、適当に並べる
- ・新聞紙を踏まないように自由に動き回る

バリエーション:

- ・新聞紙の上をジャンプする
- ・色々な動物になりきって動き回る
- ・フエが鳴ったら新聞紙の上に乗る ⇒ 新聞紙の枚数をどんどん減らしていく

狙い:

- ・道具を使って子どもの好奇心を刺激する
- ・わかりやすい目標物を置くことで、子どもたちのやる気を引き出す ⇒ 踏まないようにがんばるぞ!
- ・障害物を置くことで、自分の意志と違う動きが要求される。得意な動きだけに偏らない ⇒ 場で仕向ける(無意識にやらせる)
- ・子どもの発想力を大切に ⇒ 走るコース、飛び方、スピードなど子どもが持つ自由な発想を引き出す
- ・子どもの創造力を引き出す ⇒ 大切なのは「正しい動物の動き」ではなく、子どものイメージをからだで表現させること
- ・他の子どもとの触れ合い、助け合い ⇒ 様々なコミュニケーション、友だちと力を合わせる



今回の大きな狙い:

- 子どもが持っている「遊びたい、動きたい欲求」を満たす ⇒ 元来持っている“子どもらしさ”
- 子どもの自由な発想を引き出す。ただし正解を求めないことが大切である
- 多方面にわたる大人の関わり
⇒ 一緒に動く、子どもの表情を観て遊びの内容を変える、積極的な触れ合い、子どものやる気を引き出す言葉かけ

1 手つなぎオニ

やり方:

- ・大人がオニになり、捕まった子どもはオニと手をつないでオニになる

狙い:

- ・大人に負けたくない!という子どもの気持ちを活用する ⇒ 大人と対戦することで子どものやる気を引き出す
- ・色々な動きを経験する ⇒ 得意、不得意関係なく。止まる、曲がる、避ける、人にぶつからないように逃げる、など
- ・オニに捕まらないためにはどうしたらいいか?を考えさせる
- ・大きな声を出すことでより夢中になっていく ⇒ 心のウォーミングアップ
- ・逃げきれてうれしい!捕まって悔しい!という感情を持たせられるように

捕まえるぞー!!



2 人数ゲーム

やり方:

- ・鳴ったフエの数だけ友だちと手をつないで集まる

狙い:

- ・「しっかりと聴く」ということを遊びの中で気づかせる ⇒ しっかりと聴いていないとうまくいかない
- ・積極的なコミュニケーションの促進 ⇒ 常に他の友だちとの関わりを持たせる
- ・集まらなかった時の解決策を子どもが考える ⇒ 先生を見つけて一緒に手をつなく、「かわいそうだから数は違うけど入れてあげる」など
- ・次のプログラムのためのグルーピングとして活用できる

速くしゃなくて、壊れないのがいいんだよ



3 仲間と協力

やり方:

- ・人数ゲームでグルーピングした5グループで実施
- ・グループで課題(コーンを回って帰ってくる)をクリアする ①電車を壊さないように、②円を壊さないように
- ・グループで協力してコーンから別のコーンへ移動する

狙い:

- ・どうやったら電車や円が壊れないでゴールできるかを子どもたちに考えさせる ⇒ 子どもの答えを否定しない、唯一の正解はないのでやらせてみる
- ・仲間と協力して目標を達成する ⇒ 順位ではなく目標達成に重きを置く

一緒に拾えたよ〜



頭でできるかな…



4 ボール遊び

やり方:

- ・2人組を作る。大人が投げたボールを手をつないで拾いに行き、そのまま手をつないでボールを持ってくる

バリエーション:

- ・ボールを持った後に色々な課題を与えてボールを持って帰ってくる ⇒ お腹とお腹、背中と背中、アタマとアタマでボールを挟む

狙い:

- ・道具を使うことで子どものモチベーションを高める
- ・友だちと協力をしながら ⇒ 色々な方法の中から子どもたちが無意識に選択する(声、リズム、リーダーシップ、コミュニケーション)

今回の大きな狙い:

- 仲間と協力する ⇒ ひとりではなく仲間と一緒に達成感を味わう
- 積極的なコミュニケーション ⇒ 自分から他の友だちに関わりに行かないとできないプログラムを実施する
- 友だちの話を聞く、友だちに自分の考えを話す、友だちを助け、助けてもらう
- 子どもが答えを出す過程を大切に ⇒ その時間を与え、見守ることで子どもの考える力を育む
- 心とからだの両面でのふれあいを大切に

1 オニごっこ

やり方:

- ・適当にコーンを置く
- ・コーンをタッチしているものはオニにタッチされない。ただ3秒経ったら必ず別のコーンに移動しなければならない

狙い:

- ・分かりやすいルールで子どもたちの運動量を確保する ⇒ 子どもの動きたい欲求を満たす
- ・徐々に周りの状況を観て行動できるようになる ⇒ その要素を取り入れることでチャレンジさせる
- ・オニに捕まらない工夫、自分が有利になれる状況を作り出す工夫を引き出したい

よく見て!!

ここからコソッ!

通すもんか!



2 ゲート通過と通せんぼ

やり方:

- ・ゲートを3つ作り、それぞれ3人が手をつないでゲートを通過されないように守る
- ・ゲート通過できずタッチされたら最初からチャレンジする

狙い:

- ・相手を観ながら駆け引きをする ⇒ 観て、考えて、行動する力
- ・大切なのは個々の“間” ⇒ スタートするタイミングを指示しない、子どものタイミングを待つ
- ・お互いが協力し合う ⇒ どうやったら通過されないか子どもの工夫を見守る

飛行機だよ～ 手と足が着いていないかな?



3 積み木を使った遊び

やり方:

- ・ひとり1個積み木を持ってきて適当に並べる
- ・積み木に乗って色々な体勢を取る ⇒ 足を伸ばして座る、片足立ち、飛行機
- ・積み木にぶつからないように走る

バリエーション:

- ・色々な動物になりきって走る
- ・フエの合図で積み木の上に乗る ⇒ 徐々に個数を減らし、全員が乗り切るギリギリの数の積み木で行う

狙い:

- ・色々な動きを経験させる ⇒ 走る、避ける、飛ぶ、かわす、止まるなど
- ・自分のからだをコントロールする ⇒ バランスを取る、障害物に当たらないように動く
- ・課題を解決するために考え、行動する力 ⇒ お互いに協力し合う、アイデアを出し合う

みんなが乗れるにはどうしたらいい?



4 ボールを使った遊び

やり方:

- ・ふたりでボール1個を使う
- ・ひとりがボールを持ち、もうひとりがそのボールを落とす
- ・ボールを持っていない人は逃げ、持っている人はその人のお尻にボールを当てる

狙い:

- ・日常的に経験しない動き、動作を道具を使うことで経験させる
- ・対戦形式を用いることで子どもの意欲を高める ⇒ 結果のみにフォーカスしない
- ・ボールフィーリング ⇒ 指先の感覚、コーディネーション

今回の大きな狙い:

- 子どものチャレンジする瞬間を見逃さない ⇒ だからチャレンジしようとする
- 結果ではなく行動を評価する ⇒ 考えた、チャレンジした、友だちと協力した、など
- 答えを与えるのではなく我慢して見守りながら導いていく
- お互いが協力し合うことで難しいことも解決できるんだ、という経験をさせる
- 子どもたちがチャレンジしたくなるような課題を与えていく ⇒ やってみよう!と思えるもの

参考文献・引用

- ◆ 田中真介監修 乳幼児保育研究会編著（２００９）
「発達がわかれば子どもが見える」 ぎょうせい
- ◆ 木原秀樹著書（２０１１）「２７０動画でわかる赤ちゃんの発達地図」 メディカ出版
- ◆ 文部科学省（２０１２）「幼児期運動指針」
- ◆ 文部科学省（２０１３）「小学校体育（運動領域）まるわかりハンドブック低学年」
- ◆ 雲南市役所健康福祉部（２０１４）「雲南市赤ちゃんハンドブック」
- ◆ 林万リ監修（２０１５）「やさしく学ぶからだの発達」 全障研出版部
- ◆ 「保育所保育指針」
- ◆ 「幼稚園教育要領」
- ◆ 「幼保連携型認定子ども園教育・保育要領」
- ◆ 雲南市教育委員会 健康福祉部（２０１１）「雲南市『夢』発見プログラム幼児期版」
- ◆ 雲南市教育委員会（２０１４）「雲南市幼児期運動プログラム〈理論編〉」

別冊

リーフ
レット



MAP



※写真は、発行したものと一部異なる場合があります。

雲南市幼児期運動指針実践調査研究委員会 名簿

氏 名		役職等
委員長	野々宮 徹	愛知教育大学 名誉教授
副委員長	野津 道代	のぞみ保育設計研究所 所長
委員	武長 理栄	笹川スポーツ財団スポーツ政策研究所 研究員
委員	岸本 強	島根県立大学短期大学部 松江キャンパス 副学長
委員	佐藤 一美	教育関係会社員
委員	小川 秀樹	JFA アカデミー熊本宇城 コーチ
委員	塚田 英樹	出雲市立高浜小学校 教頭
委員	梶谷 朱美	島根県教育庁 保健体育課 健康づくり推進室 室長
委員	川本 則男	雲南市立木次こども園 副園長
委員	須山 敏子	雲南市立大東保育園 園長
委員	古瀬 芳美	雲南市立三刀屋幼稚園 園長
委員	田本 幸一郎	雲南市スポーツ推進委員
委員	河角 敦夫	斐伊保育所 元PTA 会長
委員	安部 孝文	身体教育医学研究所うんなん 研究員
委員	西川 喜久子	身体教育医学研究所うんなん 運動指導士
委員	原 恵介	株式会社キラキラ雲南 企画員
委員	大谷 麻美	株式会社キラキラ雲南 企画員

事務局	土江 博昭	雲南市教育委員会 教育長
事務局	高野 正次	雲南市教育委員会 統括監
事務局	山崎 修	雲南市教育委員会 学校教育課 課長
事務局	高橋 兼造	雲南市教育委員会 社会教育課
事務局	加津山 幸登	子ども政策局 局長
事務局	狩野 明芳	子ども政策局 次長
事務局	錦織 研吾	子ども政策局 子ども政策課
事務局	中林 明德	子ども政策局 子ども政策課
事務局	岡 紋子	子ども政策局 子ども政策課
事務局	藤原 洋子	子ども政策局 子ども政策課